

Title	福沢諭吉誕生地小史
Sub Title	A short history of Fukuzawa Yukichi's birthplace
Author	都倉, 武之(Tokura, Takeyuki)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2010
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.27, (2010. ) ,p.27- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小特集 福沢諭吉生誕百七十五年 福沢と大阪
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20100000-0027">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20100000-0027</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 福沢諭吉誕生地小史

都 倉 武 之

### 一 はじめに

本稿は、福沢諭吉（一八三五―一九〇一）の誕生地の来歴と、その地を記念する運動のあゆみを辿ろうとするものである。

福沢諭吉は大坂堂島の玉江橋北詰にあつた中津藩蔵屋敷内で誕生し、その跡地とされる場所には現在「福沢諭吉誕生地」と刻むユニークな形状の記念碑があり、小公園のように整備されている。

この地が現在のように整備されるまでには幾多の変遷があり、またその土地所有者や記念碑建立計画も様々に移り変わったため、現在では不明な点が多くなっている。そしてそのことは、同地の維持管理に非常な困難をもたらす結果を生んだ。

平成二二年五月、在阪の慶應義塾出身者が組織する大阪慶應倶楽部より慶應義塾福沢研究センターに、福沢誕生地の記念碑のために小泉信三が揮毫した「福沢諭吉誕生地」の書が寄贈され、また七月には大阪において福沢の生誕一七五年を祝う式典が開催された。筆者は小泉の書の受け入れや式典会場での展示に携わったため、誕生地の歴史を調査する機会を持ったが、これまでの経緯を示す資料が極めて乏しく、特に慶應義塾にはほとんど残されていないこと、情報が錯綜していることに驚かされた。また一〇年ほど前の筆者自身の体験として、大阪に旅行中無機質なフェンスに囲まれた更地の前に取り残されたように建つ福沢諭吉誕生地記念碑をたまたま見つけ、その後まもなく大阪在住の友人にも同地を訪ねさせると、碑が撤去されて無くなっていたことがあった。常にある続けるものと考えがちな記念碑も、その維持基盤が意外に脆弱であることを不思議に思ったことがあった。これらが本稿執筆の動機である。

誕生地については石河幹明『福沢諭吉伝』第一巻（岩波書店、昭和七年）に比較的詳しい記述がある。しかしこれは、あくまで昭和七年の伝記刊行時までの情報に留まる。また浦上五六「福沢誕生地附近」（『福沢諭吉全集』第一巻附録、昭和三三年一月）は、石河の記述の周囲やそれ以降を補完している。その後の碑を巡る問題については、大阪大学名誉教授の梅溪昇氏が関心を持たれ「福沢井蹟」の現在位置について、「戦後における福沢先生誕生地記念碑再建経緯について」（『洪庵・適塾の研究』、思文閣出版、平成五年所収）の二本の論考をまとめられている。本稿はこれらに多くの示唆を受け、梅溪氏には調査資料をご提供頂き、さらに慶應義塾福沢研究センター所蔵資料、大阪慶應倶楽部、中島雅二氏ご遺族よりご提供頂いた新資料や関係者への調査結果を加え、この土地の来歴を通史として再構築することを試みたものである。

本稿の主題は、近代の一思想家の誕生地とその記念碑の周辺を巡る歴史という些々たる問題のように思われ

るかもしれないが、その曲折と、関わった人々の意識を辿ることは、福沢研究史を側面より厚くするものとなる。また今後同地を史跡として継続的に保存していくことにも資するものと信ずるものである。

## 二 福沢の誕生とその地の変遷

### (一) 福沢誕生地の特定

福沢諭吉は天保五年二月二日（一八三五年一月一〇日）、大坂堂島の中津藩蔵屋敷内勤番長屋において誕生した。中津藩蔵屋敷の位置は、堂島川の北側、玉江橋と田蓑橋に挟まれた堂島（古くは堂島新地）五丁目と呼ばれた地域で、その後堂島浜通三丁目となり、現在では福島一丁目となっているが、一般に玉江橋北詰と呼び習わされている。より詳細には北詰の東側にまず間口約一〇間（およそ一八メートル）の他藩蔵屋敷があり、その東隣が福沢誕生当時の中津藩の屋敷地であった。堂島は元禄元（一六八八）年に成立した新地であり、中津藩屋敷の位置は元禄年間よりほぼ一定していたと考えられるが、周囲に所在する屋敷や、同蔵屋敷の敷地範囲には多少の変遷があったと考えられるものの、その変遷の詳細は必ずしも明確となっていない。<sup>(1)</sup>

福沢が生まれた当時作成された中津藩蔵屋敷内の平面図は知られていない。屋敷内の様子を知りうる唯一の資料としては『福沢諭吉伝』第一巻所収の「中津藩大坂倉屋敷略図」がある。これは『時事新報』（明治三四年二月一四日付）および『慶應義塾学報』（明治三五年一月号）に掲載された同図（図1 本稿末尾掲載、以下同）の転載と考えられるが、西隣の「他小藩の蔵屋敷」よりも間口が数倍にもなる敷地に、御殿や長屋が建ち並んでおり、東隣には「延岡藩蔵屋敷」とある。堂島川に面した表門を入れて右側の「御家老長屋」に

「福沢先生の誕生地」と書き入れられている。これはどのように特定されたのであろうか。

この図を掲載した前述の『慶應義塾字報』記事によれば、福沢が死去した明治三四年には蔵屋敷の様子は既にわからなくなっていた。そのため、詳細な誕生地点を今のうちに来るだけ特定しておこうという動きが在阪の慶應義塾出身者に起こり情報収集に努めた様子が記録されている。大阪における福沢の蘭学の師である緒方洪庵の子孫、中津生まれの古老、老婆などからの聞き取り、帝国ブラシ会社水島節次郎の協力による中津在住者への聞き取りなどを行うも十分な情報は得られなかった。唯一の決め手となったのは、水島の父が福沢諭吉の三人の姉のうち、福沢没後も大正二（一九一三）年まで存命であった服部鐘から引き出した証言であった。鐘は天保三（一八三二）年一月の生まれで、諭吉より二年早く生まれているものの、大坂を離れたのはわずか満三歳半の時であり「何が何やら覚え更に無けれど」と断りつつも、姉小田部礼（明治三〇年没）から聞いた証言として、次のように語ったという。

先年私の姉と一同東京に参りし節、姉（小田部武右衛門氏夫人）の申すには、帰途必ず大阪の蔵屋敷に立寄りお前や諭吉などの居た所を一遍見物せんととの事にて実地を見し事ありしに、姉は堂島のお屋敷の門を入りて右に折れたる長屋を指して是れぞお前達の生れた所なりとの話なりしが、成る程幼少の時に窓の障子を開ければ格子ありて、直に路上の人の往来や川の有りし事を髣髴として思ひ出せし事あり、其時姉の申すには追迫人数も多くなりしに付き、又先きの長屋を拝借して廊下続きにて往来したることありとの話なりし<sup>(2)</sup>

現在に至るまで蔵屋敷内の誕生地の位置を特定する材料は、基本的にこの鐘による証言のみである。なお、前出の蔵屋敷の略図は出典が何ら明記されていない。おそらく中津在住の水島節次郎の父による調査によって在阪の慶應義塾関係者に報告された絵図の写しと推定され、その中に記された建物の用途、たとえば誕生地と記入されている「御家老長屋」などの記載は福沢生誕時のものではなく、より時代が下った頃のものであると注記されている。

ところで、福沢がこの地に留まったのは、天保七年六月までであり、その時彼は満一歳半（数えて三歳）に過ぎなかった。したがって、大阪は彼の人格形成とは無縁のようであるが、『福翁自伝』に詳しく記されている如く、福沢家は中津に戻っても話し方や服装など、一切が大坂風であったため中津の人々となじむことが出来ない一方、大坂は故郷のように意識された土地であり、実際福沢は青年期に長崎を経て大坂に出たときの心境を「どうも旅とは思われぬ、真実故郷に帰た通りで誠に宜い心地」（『福翁自伝』）と記している。また、その後適塾において蘭学修業に励んだのも大坂の地であり、その前半、福沢はこの蔵屋敷より通学していた。

福沢の生涯にわたる思想の実証的、合理的精神や、その反映としての物事の相対的な把握、現実主義的姿勢の形成には、金銭という合理的価値を中心とする「天下の台所」としての大坂での生活経験の影響が指摘されている。<sup>(3)</sup>

ところで福沢は、少なくとも明治三年十一月、明治五年四、五月、明治一九年三月、明治二二年九月、明治二五年四、五月、明治三〇年一月に大阪を訪れている。明治二二年の家族旅行については「道中日記」と題する小冊子に旅程を書き残しており、九月二二日の条に「早朝より北ノ新地を通行して浄正橋より堂島へ渡り、玉江橋北詰中津藩の倉屋敷を見、福島逆槽の松より安治川口に廻り……」との記述がある。<sup>(4)</sup>これが福沢の誕生

地訪問が明確に記録されている最後の機会である。福沢が東京三田の慶應義塾構内の私邸において満六六歳で没したのは、明治三四年二月三日のことであった。

## (二) 蔵屋敷跡地の変遷

次に、福沢が生まれ、一時居住した中津藩蔵屋敷の地は、どのような変遷を辿ったのかをみていきたい。

中津藩蔵屋敷は、福沢が生まれた時から大きく姿を変えないまま、三三年後の明治維新を迎えたと考えられる。明治四年四月、堂島一帯の他藩の蔵屋敷と共に、鉄道寮の停車場建設予定地として買い上げられ、六月には工部省鉄道掛大阪出張所が移転している。これは、大阪のターミナル駅を堂島に設定することを目しての買い上げであったが、その後梅田が停車場と決定され、明治七年五月に梅田駅（現在のＪＲ大阪駅）が開業された。これによって不要となった同地は、明治八年六月には工部省より内務省へと移管されている。しかし旧中津藩蔵屋敷はこのとき移管の対象とはならず、引き続き鉄道寮（明治一〇年一月より鉄道局<sup>(5)</sup>）の使用するところとなり、それは明治一四年一月の、同局の神戸停車場内への移転まで継続した。

鉄道局移転後この土地は大阪府の所管となっていたが、明治一六年一月には堂島川を挟む対岸の常安町から府立大阪中学校が移転、翌年一月にこの地で開校式を挙行した。同校は、大阪尋常中学校、大阪第一中学校などこの地で改称を重ね、府立堂島中学校と称していた明治三五年に芝田町に校舎を新築し、府立北野中学校となつて移転した（現府立北野高等学校）。

同校は、大阪ではまだ珍しかった洋風建築の校舎から、老朽化著しい中津藩蔵屋敷に移転した。古ぼけた中津藩蔵屋敷は当時の在学生に強い印象を残したらしく、次のような回想が残されている。

この建物は当時でも尚ほ古色蒼然たる維新前の建築で、外郭はその儘、内部に多少の改造をして大小不揃ひの教室、まこと不便不体裁極まるものであった。<sup>(6)</sup>

この建物が大阪尋常中学校として使用されていた時代の平面図が残っており、その頃の内部の様子を知ることが出来るほか(図2)、この建物の玄関前に幕を張って撮られた集合写真が残されており、その建物の面影をわずかに知ることが出来る。<sup>(7)</sup> 写っているのは二階建ての和風建築で、玄関には立派な唐破風があったことがわかるが、周辺の様子については多くを知ることが出来ない。

明治一八年七月の淀川大洪水は、この堂島一带にも大きな被害を出し、玉江橋も流失した。この時同校舎は使用不能になったとの推測もある。<sup>(8)</sup> しかし同校には移転などの記録が無く、この時期の卒業生は一貫して旧蔵屋敷について語っていることから、洪水後もこの建物が使用されていたと考えられる。同校は明治二〇年八月、西区江戸堀東江尋常小学校分校舎を仮校舎として移転、明治二二年四月には、旧中津藩蔵屋敷を取り壊して新築された校舎に復帰している。新築予算は、二一年八月二七、二八日の府会区部会で可決され、秋に着工されたとの記録があるため、建物の取り壊しはこの前後と推定される。<sup>(9)</sup>

以後の同校は洋風二階建て、正面バルコニー上に校章の六稜の星を据えた白亜の校舎で、堂島川に面した写真が複数残されている。それらには蔵屋敷時代の面影は全く残されていない。<sup>(10)</sup>

ここで注目したいのは、同校関係者に慶應義塾出身者が極めて多かったことである。堂島時代の校長は、明治六年に慶應義塾に入学し、一時慶應義塾が開設していた大阪分校(大阪慶應義塾)の教員も務めたことのある

る矢部善藏であり、卒業生の回想には慶應義塾出身教員として沢井整平、吉見経倫、中村英吉の名が挙げられている。<sup>(11)</sup> 在学生には自校に慶應義塾風の教育が行われていることが意識されていたようで、矢部を通じて帝国大学初代総長渡辺洪基（慶應義塾出身）に紹介してもらおう者、慶應義塾に進学する者もいたという。福沢が明治十九年、二二年に大阪を訪問した際、福沢を出迎え、もてなした人物の中に矢部の名が見え、特に福沢が蔵屋敷跡を訪問した二二年の旅行時、福沢の慰労会発起人の筆頭に矢部の名がある。<sup>(12)</sup>

蔵屋敷の建物が失われたのは、老境に入りつつあるとはいえ福沢がまだ自分の経営する『時事新報』において健筆をふるい、社会の一線で活躍する言論人だった頃であり、遺跡保存といった意識が皆無であったことは当然のことである。<sup>(13)</sup> しかし、建物取り壊し後も唯一残されていたのが、後に福沢の産湯の井戸といわれるようになる蔵屋敷時代からの古井戸であった。慶應義塾出身者の福沢に対する強い敬慕の情を考え合わせるとき、その地を福沢の誕生地として象徴的に想起させる遺跡となったのが、その井戸であったと考えられる。それが意識されるようになったのは福沢の同地訪問と無関係ではないかもしれない。旧蔵屋敷の建物が人々の記憶から失われる一方で、福沢とその地を結ぶ遺跡として井戸の存在が徐々に認知され、記憶されるようになったことは、いわば福沢が過去の人ないしは歴史上の人物へと移行していったことと軌を一にするといっても良いであらう。

福沢が亡くなって間もない、明治三五年一月の『慶應義塾学報』の記事中で、この井戸について「堂島中学の邸内にある井戸こそ先生産湯の井戸なりとの説もあれども、是れは単に想像談に過ぎずして確なる証跡を得ず」とあるように、これを産湯の井戸とすることには特に根拠があったわけではないと考えるべきだが、福沢誕生地として意識されはじめた頃には蔵屋敷建物は失われており、井戸を誕生地の象徴として意識するように

なれば、それを産湯の井戸と呼ぶことも自然なことであったと考えられる。

なお、明治二二年にこの地に完成した中学校新校舎の略図には井戸の位置が記されたものがある。この図中には、校庭にあったと伝わる榎や柳、藤棚などを示すと思われる印も記入されるなど、比較的詳細で信頼に足るものと思われる。今後の参考資料として掲げておきたい（図3）。

### 三 建碑運動の発生と転回

中津藩蔵屋敷跡に所在した堂島中学校の移転は明治三五年四月であり、その二か月後の同年六月に常安町の中之島高等女学校が移転、大阪府立堂島高等女学校となった。福沢諭吉の誕生地に記念碑を建てる動きが具体化するのはいちようどの所在学校の転出入の頃である。

そのきっかけは明治三四年二月の福沢の死であろう。記念碑に関する最も古い記録は福沢が亡くなった年の誕生日の二日後、すなわち明治三四年一月一日付『時事新報』記事であり、既に記念碑の計画が具体化していた様子が見て取れる。この記事によれば、記念碑建設の発案者は大阪府知事菊池侃二で、「名士の偉蹟の空しく湮没せんこと」を憂い、大阪在住の慶應義塾出身者に誕生地への建碑を提案したという。義塾同窓者の中には、記念碑建立は「先生の素志に背く」として「斯る無益の企は止めて専心慶應義塾の維持繁栄を謀るこそ先生に対するの義務なれ」という声もあったが、記念碑が「縦令先生の素志に違ふことありとするも、他年幾多の学生中此記念碑を見て感奮興起するものあり、今後第二の福沢先生を此地より出すこと必無とは云ふべからず。建碑の事愚に似て決して愚にあらずとの精神終に一致」するところとなったという。そして、本山彦

一、平賀敏、物集女清久らが図案を検討していると報じている。

また、建立にあたっては府の所有地である記念碑の敷地を同窓者で購入し、女学校に寄附する手続きをすることで菊池知事の了解も得つつあると記されている。

菊池は大阪府の教育制度や施設整備に熱心だった人物で、福沢が創立に関与し、桐原捨三、山本達雄ら福沢門下も校長を歴任した大阪商業講習所（現在の大阪市立大学）の校長職にあったこともある。また、当時府知事の官舎は中津藩蔵屋敷跡の堂島中学校校舎のすぐ東隣にあった。

ところで、この記事の中で「先生の素志に背く」という心配は、何を意味するものか。これは福沢が、生前虚飾を排し、功利的思想を鼓吹したことに加え、権威主義を嫌ったことと関係する。福沢は、爵位や叙位叙勲の類を、政治という世事の一分野を担当しているに過ぎない政府が世の中全体の上位に位置する如くに振る舞うという意味において嫌うと共に、これらが一種の新たな権威を生み出し、人々がそれに阿ることをも嫌い続けた。そのこととの関連で、自他を問わず銅像や記念碑などの設置を好まなかったことが知られる<sup>(14)</sup>。そういったものを設けるにふさわしい人物には、関係資料の展示施設などを通して、あるいは伝記などの編纂によって、その業績を広く世にあかしていくべきであると考えた。

福沢は、門下生たちから還暦の祝いとして銅像制作を乞われた際も「無益」と主張してなかなか承諾せず、遂に承諾しても、後に完成品を慶應義塾の講堂から勝手に持ち出し、自宅の蔵にしまい込んでしまった。<sup>(15)</sup>

このような経緯を知る門下生たちは福沢の記念物を作ることを避け、慶應義塾構内に他の福沢門下生らの胸像を設置しても、福沢の銅像や記念碑などは一切設置しなかった。慶應義塾の構内に福沢の胸像が初めて設置されるのは、実に昭和二八（一九五三）年のこと、つまり福沢没後五〇年以上を経たことであった。したがっ

て記念碑建立は、福沢の思想と密接に関係する重要な問題として、この時の懸念となったものである。

前述の記事からおよそ一年後には、さらに記念碑の準備が進行した様子を伝える記事が『時事新報』『慶應義塾学報』にみえる。それによれば、明治三六年二月三日の福沢三回忌に合わせて行われた大阪の義塾同窓会において、平賀敏より「高五尺の白石の上に石造の地球儀を安置し、其赤道の処だけに磨きを掛け之に先生の誕生地たることを記す」という碑のデザインが紹介され、東京の慶應義塾当局にも念のため確認するとの報告がなされている。さらに次のような建碑の趣意書が発表された。長文にわたるが全文を掲載したい。

#### 福沢先生誕生地記念碑建設の趣意

福翁自伝の開巻第一に「私共は皆大阪で生れたのです、兄弟五人総領の兄の次の子が三人、私は末子、私の生れたのは天保五年十二月十二日父四十三歳、母三十一歳の時の誕生です」云々と。福沢先生は実に此大阪に生れ、天保七年六月嚴父不幸にして世を去られし迄三年の間此土地にて成長せられたるものなり。其誕生の地と云ふは旧中津藩の倉屋敷にして堂島川の北岸に在り、今は地方庁の所管にして従来堂島中学校の敷地なりしを昨年より改めて女学校となし、現に多くの女学生が新女大学の著者にして婦人の智徳開発に最も熱心なりし先生の誕生の故地に新空氣の教育を受けつゝあるは偶然にあらざるべし。

福沢先生は其誕生地の大阪にありしのみならずして其修業の地も亦大阪にあり。同じく自伝の「大阪修業」と云ふ題目の項に「大阪に足を止めまして緒方先生の塾に入門したのは安政二年卯年の三月でした、其前長崎に居りし時には勿論蘭学の稽古をしたので（中略）何処の何某に便り、誰の門人になってミッシリ蘭書を読んだと云ふことはないので、ソコで大阪に来て緒方に入門したのは是れが本当に蘭学の始まり、

始めて規則正しく書物を教へて貰ひました」と。先生は実に安政二年より同五年の二十五歳まで大阪に在りて真の書生々活を此土地になしたるものと云ふべく、其後江戸に出づるの後は一個の蘭学先生にして最早書生時代は過ぎ去りしものなり。

之に依て觀れば大阪は先生の一代に対して唯その誕生の初声を揚げたるに止まらず、其青年時代に於て先生の思想と行いを修練したるものは此土地なり。大阪古来俗地にして学問の地にあらず高尚の思想は養ふべからずとは先生の一代に対しては全く反対にして、先生は實に大阪の産にして又大阪にて修業したる人なり。当時先生と同じく緒方の塾に在りし書生中には亦先生と同じく明治革命の大氣運に与りし人も少なからざるは人の知るところなるべし。斯くの如くに福沢先生と我大阪とは縁故深くして其生涯の履歴と離れざるものなれば、茲に我大阪の同窓者及び故先生の親友若しくは先生の学問思想を信じたる人々は、先生の爲めに其誕生地に記念碑を建設して之を永遠に伝へんことは独り後進者の希望としてのみならず、又大阪に名誉の記念として最も貴重すべきこと、いふべし。先生一代の成功思想の如きは茲に記すの要なし。希くは先生の創立に成る慶應義塾の先輩後輩を始めとして先生の思想学問に多年同情を有せらる、大方の諸君は此挙を賛成せられんことを。

明治三十六年二月三日先生の三回忌に当りて

發起 人 一 同<sup>(16)</sup>

この趣意書は大阪に生まれ、大阪が形作った福沢諭吉という側面を強調している点に注目したい。この報道が『慶應義塾学報』に掲載されているところを見れば、義塾当局において特に異論があったとは思われない。

この頃には、構内の井戸が福沢の産湯の井戸として、その地に学ぶ生徒たちに広く知られていたらしく、「憧憬の種」の一つとして、また懐かしい学園の一情景として、当時の教員や生徒の回想に語られている<sup>(17)</sup>。この頃、福沢の四女志立滝が、福沢誕生地付近に記念の松の木を植樹したという<sup>(18)</sup>。

これ以後誕生地記念碑に関する動きは十五年近く、一切記録から見えなくなる。

その理由を推測すれば、明治三七、八年は日露戦争の時期である。『慶應義塾学報』に見える大阪慶應義塾同窓会記事においても、この時期には戦争の話題で持ちきりであったことが伺われ、実業界で活躍中の福沢門下生たちは、それぞれの社会的立場において戦争への対応に追われていたため、募金運動などの気運が高まらなのまま、時機を逸した可能性がある。加えて行政側の理解者であった府知事は、警察官僚出身で保守的な人物であった高崎親章へと変わり、府有地への建碑に支障が生じた可能性もある。

さらに明治四二年七月三十一日にはいわゆる「北の大火」が堂島一帯を襲い、堂島高等女学校も校舎の多くを失い（ただし本館、屋内体操場は全焼を免れている）、前述の志立滝植樹の松も焼失したという。元来この校舎は建て替えを前提とした当面の建物として堂島高等女学校が利用していたものであり、明治四三年三月には梅田の新築校舎に移転、梅田高等女学校と改称された<sup>(19)</sup>。

以後この土地は、用途が定まらないまま放置される。大正六年六月一四日に至り、大阪府参事会において、旧堂島高等女学校敷地および東隣の知事および内務部長官舎跡全体が、府立大阪医科大学病院の用地とされる<sup>(20)</sup>ことが決定した。同病院は対岸の常安町にあったが、同年二月に失火により焼失し、この地に新築移転することになったのである。

福沢論吉誕生を記念する碑の話題が十五年振りに『三田評論』（慶應義塾学報の後身）に載るのは、この年

の一〇月である。大阪在住の慶應義塾出身者が組織する大阪三田会の本山彦一と平賀敏によって、記念碑を建立する議が起ったことが、十五年前の計画には一切言及しない形で簡略に記述されている。<sup>(21)</sup>したがって、記念計画の再燃は、誕生地の土地利用確定と連動したものと考えて良いであろう。募金計画はその後もなく、慶應義塾当局の全面的な協力の下で進行し、東京三田の慶應義塾監局（法人本部）内に窓口を置く形で、大正七年一月には慶應義塾関係者に「福沢先生生誕地記念碑建設資金」募集の案内状が一斉発送された。この時の案内状は以下のようなものである。

拝啓 時下益御清栄の段奉賀。陳者福沢先生が天保五年十二月十二日大坂堂島浜通三丁目奥平家倉屋敷に於て御生誕相成りたるは御承知の通りに有之候処、同地点は現今大阪医科大学敷地に相成居候に付、大阪府知事及同医科大学長に交渉し、右地点（拾貳坪）保存の義允諾を得申候。依て同所に記念碑を建設して永く偉人生誕の跡を記念致度候間、左記条項御賛同被下度此段得貴意候。敬具

- 一、賛同者は一人壱円以上拾円以下寄付することとし慶應義塾々監局内石田新太郎宛御振込のこと
- 一、記念碑の意匠及残余金処分の義は発起人に御一任のこと
- 一、申込締切は大正七年三月末日のこと

大正七年一月

発起人

伊藤欽亮 井上角五郎 犬養毅 磯村豊太郎 池田成彬 石河幹明 波多野承五郎 西野恵之助 豊川良平 尾崎行雄 和田豊治 門野重九郎 門野幾之進 鎌田栄吉 高橋義雄 竹越与三郎 名取和作 成瀬

正恭 久原房之助 山本達雄 藤山雷太 福沢捨次郎 福沢桃介 小山完吾 阿部泰蔵 青木徹二 朝吹  
 英二 北川礼弼 莊田平五郎 平沼亮三 平賀敏 本山彦一 鈴木梅四郎

発起人として名を連ねている人々は、ほとんどが東京を拠点として活動する福沢門下の実業家であり、大阪を拠点としていたのは、当初より記念碑計画に名前が挙がっていた本山、平賀のみといってもよいであろう。すなわちこの時の建碑運動は、大阪の運動ではなく、慶應義塾出身者全体の運動となっていたことを意味している。明治三六年当時の趣意書が大阪色を全面に出し、大阪人に訴える内容であったのに対して、今回の案内に地域色が余りみえず、意義などを改めて説いていないのは、その対象が福沢をよく知る慶應義塾出身者全体に向けられていたためといえよう。

このことは、福沢没後において福沢の業績が社会的には忘却され、どちらかといえば「慶應義塾の福沢」という内向きの評価に限定された時代であったことを表しているとも考えられる。また、慶應義塾の組織を挙げた募金活動ではなく、あくまで有志者による自主的な運動という体裁を採っている点には、慶應義塾において福沢のいう実学（実証的合理的な物の見方）を身につけた者が、主体的に協力する「社中」という思想の影響がみえ、また門下生中の実業家には、相当な額を支出しうる人物もいたはずであるが、募金額を「一人壹円以上拾円以下」としていることは、有志者間で上下無く金銭を分担して完成させ、碑を私させない趣旨であろう。以後毎号の『三田評論』誌上に、募金者と応募額が逐次掲載され、その総額は最終的におよそ五三四〇円に達した。<sup>(22)</sup>

一方、かつて堂島高等女学校の校舎が建ち並んでいた地は、大阪医科大学が管理を委託された山口厚生病院

が建設された。同院は、大阪市在住の山口玄洞が府に寄附した一〇〇万円によって設立された財団法人組織の慈善施設であり、治療費が払えない低所得者の救済を目的としていた。<sup>(23)</sup> そのため、入り口を目立たぬよう低くして入りやすくするなど、行き届いた配慮がなされ、医局は院長以下すべて大阪医科大学から派遣されていた。同院は大正一〇年一月着工、九月に四階建ての鉄筋コンクリート建築として竣工し、一〇月に開院した。しかしその建設の際、残念ながら福沢産湯の井戸と呼ばれていた井戸もつぶさざるを得なくなった。これを惜しんだ「篤志の一医員」によって、井戸の場所に当たる地下廊下に「福沢井蹟」と刻んだ大理石がはめ込まれ、その跡が明示されることで、かろうじてその地が記念されることとなった。<sup>(24)</sup> この井蹟を巡る経緯は『福沢論吉伝』にのみ記録されている。

こうして、中津藩蔵屋敷跡地から、蔵屋敷時代の遺物が一切消滅することとなったのである。

#### 四 「福沢先生誕生地」記念碑の建立と撤去

大正七年一月より募集された「福沢先生生誕地記念碑建設資金」は、前述のように五〇〇〇円以上を集めたが、再び計画は延引した。このときの理由は定かでない。建設予定地である大阪医科大学敷地においては、山口厚生病院に続き、その東隣に大学附属病院の本館および病棟が建築された。その完成は大正一三年三月のことである。記念碑建設は、その建設を妨げることのないよう完成を待つこととなっていたと思われる、資金は定期預金に積み立てられていた。その間の大正一二年九月に関東大震災が発生し、慶應義塾当局および発起人たちは、それぞれ震災復興等に傾注すべき状態となり、記念碑計画は自然と棚上げされたのでは無かろうか。

建碑に再び動きが見えるのは昭和二年一二月の『三田評論』に掲載される、「福沢先生生誕地記念碑建設に就て」という次の記事である。

目下大阪医科大学の敷地となれる福沢諭吉先生の生誕地即ち堂島浜通三丁目奥平家蔵屋敷跡に数年前より同地塾員有志の発起にて記念碑建設の計画あり、寄付金額既に八千六百余円に達し居れるが、近く愈々実行に着手する筈なれば、此の際特に寄附希望の向あらば塾より発起者に取次ぐべく万事塾監局庶務係に申込みられたし。

ここに「八千六百余円」とある募金額は、実際の寄附金五三四〇円余りに定期預金の利子加わったの額である。最終的な資金は一万一六五円六七銭となった。<sup>(25)</sup>

以後は順調に準備が進み、二年後の昭和四年一〇月一七日に地鎮祭、翌日起工し、一一月二〇日に竣工、二六日に除幕式が行われた。

除幕は福沢一太郎（諭吉長男）によって行われ、慶應義塾長林毅陸、大阪医科大学長楠本長三郎、志立滝（諭吉四女）、緒方収二郎（洪庵六男）ほかの来賓に加え、大阪在住の慶應義塾出身者一五〇名以上が参列した。<sup>(26)</sup>この時、特に建碑の相談に与った人として佐多愛彦前大阪医科大学長が参列している。

碑は円塔形で、設計は彫刻家の朝倉文夫に依頼、直径二尺、高さ一〇尺、厚さ三分で、材質は銅（台座は御影石）、铸造は大阪の大国美術鑄金所（大国寿郎）が行い、工事は大林組によって行われた。<sup>(27)</sup>

碑の設計については、何ら由来が伝わっていない。下端には蓮の花弁を思わせる彫刻があり、上部には光線

の如き刻みがあることから、明治新文明の発信源としての福沢の誕生を象徴的に表現したものかと想像される。もしそうであるならば、今日しばしば「砲弾型」と形容される表現は適切ではないと考えられる。また富田正文は『考証福沢諭吉』の中で次のように記述している。

初め建設委員の間でいろいろなデザインが考慮され、福沢の著訳書を円形に立て並べてそれぞれの背文字に書名を表わし、それを礎石としてその上に地球儀を置くというのが最も有力な案であったが、彫刻家の朝倉文夫に相談したところ、子供のおもちゃじゃあるまいしと一笑に付されたという。結局、朝倉のデザインによりスッキリした鋳銅の円筒形の記念碑が出来あがり……<sup>(28)</sup>

この記述の出典は明らかでないが、ここにいうデザインが、前出の当初案にみえる地球儀のことであろうか。碑面題字は慶應義塾出身の政治家で能書家としても知られる犬養毅の揮毫により「福沢先生誕生地」と刻まれ、裏面の碑文は鎌田栄吉によって選ばれた。鎌田もまた慶應義塾出身で福沢の晩年に慶應義塾長に就任以来、四半世紀にわたってその職にあり、のち文部大臣も務め、この当時は帝国教育会会長であった。京都の書家山本竟山の筆によって記されたその撰文は次の通りである。<sup>(29)</sup>

犬養毅題字 鎌田栄吉撰文

此所八旧中津藩主奥平家ノ倉屋敷跡ニシテ、天保五年十二月十二日（西曆千八百三十五年一月十日）福沢諭吉先生誕生ノ地ナリ。先生ノ父百助君ハ当時倉屋敷ニ在勤シ、其長屋ニ住居シタリ。先生産湯ノ井ハ、

山口厚生病院地下室ノ廊下ニ福沢井蹟ノ四字ヲ刻シタル大理石ヲ以テ表示セリ。

昭和四年十一月

慶應義塾社中建之

京都山本由定書

碑文は実に簡潔で飾り気が無く、特に地上の記念碑と病院内地下廊下の「福沢井蹟」が一体のものとして意識されていたことがわかる。記念碑の除幕と共に、その背後に位置する山口厚生病院の地下にある「福沢井蹟」へ観覧者を誘導する標識も設置された。<sup>(30)</sup>

なお、記念碑の位置も、福沢井蹟のある山口厚生病院敷地に近接した適切な位置という観点から定められたと考えられ、それが正式に決定されたのは、着工直前の一〇月上旬のことであったようだ。<sup>(31)</sup> 当時の写真を見れば、碑の位置は、山口厚生病院と大病院本館を結ぶ二階の連絡通路を背景とし、右側には山口厚生病院敷地の東側境界を示す既存のコンクリート塀が隣接している。また今回見出した設計図面(図4)によれば、背後には山口厚生病院の地階(福沢井蹟所在)に通じる階段があり、この階段の幅を背面、大病院の塀を側面の幅として記念碑敷地が設定されたことがわかる。<sup>(32)</sup> したがって、この建設位置設定は、中津藩蔵屋敷表門を入れて右手の長屋が誕生地であるとの服部鐘の証言以上の新たな情報や資料考証によるものではなく、誕生地の長屋付近の便宜の地、すなわち山口厚生病院敷地の最も東側の隅が選ばれたに過ぎないと考えるべきであろう。<sup>(33)</sup>

ところで、記念碑建設当時、土地は大阪府の所有であったが、慶應義塾関係者の建設資金から土地を買上げて改めて府に寄附したり、碑そのものを寄附するといった、記念碑建設の際一般的な手続きは行われず、建設費の余剰金を大阪医科大学へ寄附することで、今後永久の管理を委託するという形式が取られることとなっ

た。このことは、次の書簡からも明らかである。

肅啓 百花爛漫の好季に御座候処、益々御清適の段奉慶賀候。陳は福沢諭吉先生誕生地建碑紀念として金貳仟七百円及青銅製花瓶壹個本大学へ御寄付を忝し感激の至に不堪候。右寄附金は本大学基金に編入し御芳志を不枉に伝ふると共に、紀念碑は永久本大学に於て管理維持可致候間、何卒御省慮被下度、尚寄附金並花瓶の收受に關しては直に其筋へ正式の手續致置候に付、不日何分の沙汰可有之と存候得共、不取敢以寸楮謝意を表し度、如此御座候。勿々拝具

昭和五年四月十一日

大阪医科大学長 楠本長三郎

慶應義塾長

林 毅陸 殿<sup>(34)</sup>

この寄附金二七〇〇円は、記念碑の鑄造費（二二五〇円）、設置工事費（二五〇〇円）とほぼ同等で、昭和五年五月九日付をもって正式に大阪医科大学に受領されており、同日付で改めて同大学名義で慶應義塾長林毅陸宛の礼状と領収書が送られている。<sup>(35)</sup>

大阪医科大学としては、府知事や学長による特別な配慮をもって遇したものと考えるべきであろうが、碑そのものを大学に寄附する手続きが取られていないため、土地は大阪府、碑は碑文の記すところでは「慶應義塾社中」という私人の所有物、維持管理を大阪医科大学に永久に委託したという形式になったわけである。「慶

「慶應義塾中」とは必ずしも慶應義塾そのものではない。確かにこの建碑の資金募集の事務局は当初慶應義塾監局におかれ、随時塾長も協力しているが、既に述べたとおり、この建碑は、組織を挙げてではなく、有志が主導するところにも価値が認められている側面があったと考えられ、実務全般を担当したのは大阪の慶應義塾出身者、特にその組織する大阪三田会であった。この所有や建碑主体の曖昧さが次々と問題を生じさせることとなっていく。

その布石は程なくやってくる。大阪医科大学が昭和六年四月三〇日の勅令をもって大阪帝国大学医学部となったのである。したがって、記念碑は依然として「慶應義塾中」の所有でありながら、その土地や施設は大阪府から国へ寄附され、府有地から国有地となったのである。<sup>(36)</sup>この際、改めて大阪帝国大学と慶應義塾の間で何らかの取り決めが交わされた様子はない。

さて、この初代誕生地記念碑は、最初にして最後の災難に遭い、わずか一五年で姿を消すこととなった。その原因が昭和一六年九月一日施行の「金属類回収令」である。資源枯渇を補うために改正を重ねて強化されたこの法令により、銅製の誕生地記念碑も金属回収の対象となることを免れなかった。

同碑が供出されたのは昭和一八年六月のことである。<sup>(37)</sup>この時、行政当局との折衝などには、建碑後の昭和五年七月に、大阪在住の慶應義塾出身者が結成した大阪慶應倶楽部（大阪三田会の後身）が当たった。供出の結果、御影石製の台座だけがそのまま残されることとなったが、それを嘆いた同倶楽部関係者は、ポルトで碑が固定されていた二段の台石の上に、さらにもう一段御影石の段を重ね、そこに供出の事実を刻み、そこが福沢の誕生地記念碑の跡であることを明示した。

慶應義塾福沢研究センターが所蔵する昭和二八年頃と思われる台座の写真（ID：p1000376）を見ると、台石

の三段目、正面左側に「金属非常回収ニ依リ之ヲ供出ス／＼年□月／大阪□□／□□」<sup>(38)</sup>と文字が刻まれていることが辛うじて確認できる。また、戦後の同倶楽部機関紙には、残された台座を上（背後の病棟間連絡通路内）から眺めたものと思われる写真があり、そこには「福沢先生誕生地記念碑趾」と大きな字で刻まれていることがわかる。この頃の様子を後に再建に奔走する大阪慶應倶楽部の山川迪吉が次のように語り残している。

戦争中に、其塔が円錐形の金属だったが、回収されてしまい、荒れに荒れ——、又福沢先生は一部軍部から妙な目で見られるし、我々も肩身のせまい、いやな思いを長いことさせられ、その荒れた碑の前を通過に涙がこぼれるのでした。<sup>(38)</sup>

こうして明治三四年より福沢門下生が相談を重ね、昭和四年にようやく完成した福沢諭吉の誕生地記念碑は、はかなくもその姿を消してしまったのである。ただし「福沢井蹟」だけは大阪帝国大学医学部附属病院山科病館（元山口厚生病院）建物の地下廊下にひっそりと残された。昭和二〇年六月の大阪大空襲においては、その銘板の埋められた廊下に無数の焼死者が折り重なるように安置されたこともあったが、建物とその表示板は、戦争をくぐり抜けることが出来たのであった。

## 五 「福沢諭吉誕生地」記念碑の建立

慶應義塾は戦時中の空襲により全国の大学中で最大の罹災校となり、戦後は長くアメリカ軍に主要なキャン

パスの一つを接収されるなど、多大な損害と復興への障害を抱えることとなり資金難にあえぎ続けた。校舎の再建に邁進し、混乱する教育現場の收拾に努める慶應義塾には、創立者の誕生地とはいえ、記念碑を再建することに目を配る余裕は全くなかった。そもそも、記念碑が金属供出により失われたことは『三田評論』など慶應義塾出身者の目に触れる媒体において報知された形跡が無く、それほど広範に知られていたとも思われない。大阪慶應倶楽部もまた、倶楽部が借り受けていた堂島ビルディング屋上の倶楽部専用室を全焼し（犬養の題字や山本による撰文浄書はこの時に失われたと推定される）、その後事務所が移転を繰り返すなど困難な時を送り、記念碑再建を企てる気運は皆無であった。

ようやく再建が話題となったのは、昭和二十七年五月二、三日の二日間にわたって、全国の慶應義塾出身者が集う「第十八回全国連合三田会」が大阪において春季総会を開催した機会であった。同会の大阪開催は昭和八年以来二〇年振りのことであり、多くの義塾関係者が大阪に参集したため、当然記念碑跡も人目に触れ、再建が話題になったものと思われる。翌昭和二十八年一月一〇日の福沢誕生日には、大阪慶應倶楽部の有志者によって記念碑跡の台座に「福沢論吉誕生之地」と墨書された木札が立てられ、再建の気運が徐々に高まっていった様子がわかる。<sup>(39)</sup>

同年七月には、大阪慶應倶楽部によって再建の趣意書がまとめられ、倶楽部会報で発表された。その全文は左の通りである。<sup>(40)</sup>

福沢先生誕生記念碑再建趣意書

福沢論吉誕生之地は大阪堂島玉江橋北詰、豊前中津藩奥平家蔵屋敷で、現在は大阪大学病院の堂島川に面

した一角にあります。この由緒ある地に昭和四年大阪三田会が中心となって記念碑を建立しましたことは、みなさまのすでにご承知のこと、存じます。

しかるにこの青銅の記念碑は、戦時中金属回収令により惜くも供出のやむなきにいたり、いらい花崗岩の台座のみを残して今日にいたっております。

昨年五月大阪において二十年振りの全国連合三田会が開催せられた際、諸先輩ならびに大会委員間に再建の声がおこり、当倶楽部においても山川迪吉君等を中心に再建計画につき熟議を重ねておりましたが、いまやほゞ具体案を得るにいたりました。すなわち碑材をブロンズに代えて本御影石をもってし、題字は小泉信三君に依頼いたしましたところ、快諾を得ましたので、来春一月十日先生第百二十回誕生日の当日を卜し除幕式を挙げる予定をもって、目下諸般の準備をすすめております。したがってその再建に要する資金は、これを広く社中塾員ならびに先生の遺徳を欣慕する有志諸賢に仰ぐこととし、その要項を左記のごとく定めました。切に塾員有志各位のご賛同ご協力をお願いいたします。

なおこの計画について大阪大学病院当局に親しく懇談しましたところ、宇山安夫病院長、安田竜夫教授等の熱心なるご賛助を得、建碑の周辺を緑地帯とする方針をもってとくにご協力をいただくこととなりました。ここにそのご厚意を披露し、あわせて感謝の意を表する次第であります。

昭和二十八年七月

大阪慶應倶楽部

会長 宮原 清

一、予算表（略）

## 二、資金募集方法

- 1、目標額 七十万円
- 2、一口三百円とし広く塾員各位より募金する（独り一口以上）
- 3、支払い方法（略）
- 4、募金締切期日 昭和二十八年九月三十日

これによれば、趣意書発表までに再建の具体案はほぼ詰められており、大阪大学当局とも折衝を終えていたと考えられる。この趣意書には記念碑デザインも添えられており、その後慶應義塾出身者有志の月刊誌『塾友』に掲載された資金募集広告にも同じ図が添えられているところをみれば、記念碑のデザインもこの図の通りに確定していたものようである（図5<sup>(41)</sup>）。碑の材質は赤みを帯びた御影石である万成石が予定されていたことが予算表からわかる。これは、戦争の苦い経験から金属製を避けたものである<sup>(42)</sup>。除幕予定は昭和二十九年一月一日の福沢誕生日に定められている。

『三田評論』は戦時中の休刊後再開されておらず、広く慶應義塾関係者に呼びかける媒体は乏しかったと思われるが、ごく少数の有志が窓口となって奔走し、特に大阪慶應倶楽部副会長山川迪吉の周旋によるところが大きいようである。募金はその後、二八年一〇月末まで延長されて十分な額を集めたとみられるが、最終額などについては一切記録が残されていないばかりでなく、この時の建碑についての経緯を示す資料は、現在までのところ慶應義塾、大阪大学内で全く確認されていないことから、その準備がほとんど大阪慶應倶楽部によって行われていたことは明らかである。しかし同倶楽部も古い資料をほとんど失ってしまっているのである。

趣意書中にあるとおり、題字は小泉信三に依頼されているが、小泉は五月一四日より一〇月三日まで外遊の途にあるため、出発前に題字は引き受けていたと考えられ、揮毫は帰国後であろう。碑文については、一月六日に高橋誠一郎に依頼され、さらに高橋の推薦により慶應義塾出身の書家西川寧に浄書が依頼され、一日には大阪に届けられたと考えられる記録が残されている。<sup>(43)</sup>驚くほど慌ただしいスケジュールである。

小泉信三による題字は「福沢諭吉誕生地」と記され、撰文は次の通り刻まれた。

幕末明治の大教育家福沢諭吉先生こゝに生る。時に天保五年二月十二日（西暦一八三五年一月十日）。こゝは旧豊前中津藩倉屋敷の長屋跡である。先生の父百助は一面に於いて、経学者、詩文家であったが、然も、理財の道に精通した循吏であつて、金穀会計の俗吏に奔命して其生涯を終つた人である。彼は妻お順が、大きな、瘠せて骨太な五番目の子を産んだ時「これはよい子だ、大きくなつたら寺へ遣つて坊主にする」と語つたと伝へられてゐる。封建門閥の世に下級士族が其子をして名を成さしめる道はこれを仏門に入らしめる以外にはなかつたのであらう。当時に於いて、この子が後年、西洋文明東道の主人となり、封建的観念形態の打破に努力するに至る将来を誰が予見し得たであらうか。

昭和二十九年一月 慶應義塾社中建之

題字 小泉 信三

撰文 高橋誠一郎

書 西川 寧

この題字と撰文は、戦前のそれとはそれぞれ大いに異なっていた。まず第一に戦前は「福沢先生誕生地」とされていた題字が「福沢論吉誕生地」とされていること、第二に戦前の撰文に比して、この地の由来や福沢について懇切に説明され、代わりに福沢井蹟の説明がないことである。

第一の点については、揮毫が小泉信三によることが重要である。小泉は慶應義塾長を努めていた昭和一二年に福沢に関する二つの記念碑、すなわち長崎にある「福沢先生使用之井」と「福沢先生留学址」の題字を揮毫しているが、いずれも「福沢先生」と記している<sup>(44)</sup>。しかし彼は戦後にいたり、特に文筆家としても活躍の幅を広げる中であって、福沢を慶應義塾内において語る場合と、一般あるいは学術的に語るときとを意識して区別する必要を感じ、それを実践しているとして次のように書いている。

私は福沢と自分との個人的関係について語り、或いは慶應義塾の学生や卒業生を相手に福沢のことを語るときは先生と呼ぶ。この方はごく自然に出る。福沢を歴史上の人物として、その事蹟と事業とを客観的に記述し、評論しようとするときには、福沢論吉と呼ぶ。これは前年来きめて実行しているが、この方は多少ゴゴチナク感ずる。尤も近頃だいが慣れた。一般世間の人にはどうでも好いこんなことが、慶應の者にとつては一の問題なのである。……福沢の思想なり、事業なりを、客観的に、学問的に取り扱う場合、その客観性学問性と先生という尊称とは相合わない。「子曰、」として弟子等の言行を伝えたような態度で福沢を語ることは、無論私は屢々する。しかし彼れの思想や事業を正確に記述し、時の環境と背景の前に、彼れを適當の大きさをもって描き出さんとするには、別の態度をもって臨まなければならぬ。尊称をもって語ると否とは瑣事に類するけれども、やはり気をつけたいと思う。<sup>(45)</sup>

したがって、戦前は「福沢先生誕生地」と記してあった題字を、「福沢諭吉誕生地」と改めた文字の選択には、そのことに対する小泉の強い自覚があったと見るべきである。既に発表されていた再建記念碑のデザイン案(図5①)の題字には「福沢諭吉先生誕生地」との文字が入れているところをみると、「先生」の文字を用いなかったのは、やはり一人小泉の判断であったと見るべきであろう。しかし撰文においては書き出しの一文で「福沢諭吉先生」という表現が用いられている。このことは、小泉、高橋、さらに建碑の実務に当たっていた山川迪吉らの間で、これらの事項について、意思の統一が図られる時間的余裕がなかったことを示していると思われる。

次に第二点、すなわち撰文のスタンスの変化について考えてみたい。この文章において福沢は「幕末明治の大教育家」「西洋文明東道の主人」であり、「封建的観念形態の打破」に努力した人物とされている。これは、福沢という人物に対して戦後与えられた肯定的評価を端的に凝縮した表現である一方で、この史跡が慶應義塾に閉じられた存在ではないという意識が、期せずして小泉とは異なる形で表現されたものといえるのではなからうか。ここに「福沢井蹟」に関する記述が加えられなかったことも、将来にわたる長期的な視野に立つとき、老朽化していた山口病館その他の建物がどのように変遷するかわからないことを念頭に置いたものであるかと想像される。しかしこのことは、井蹟の存在への注意を薄めてしまうこととなった。

なお、この撰文には正確ではない点が二つある。ひとつは福沢の旧暦誕生月が「十二月」と記されるべきところ「二月」となっている明確な誤りである。この誤りがどの段階で生じたかは不明であるが、誰にも気付かれないまま除幕式を迎えてしまったらしく、後に修正されたが今なお痕跡が生々しい。<sup>(46)</sup>このことも建碑の準備

が非常に慌ただしく行われていたことを示している。

今ひとつは、撰文末尾の完成年月が「昭和二十九年一月」となっていることである。前述の通り、これは募金開始当初からの完成目標であり、撰文の完成を急いだのもそのためであった。実際には一月までずれ込んだが、今もそのままとなっている。

何故予定より一〇か月も遅れたのか、というのが次の問題である。

撰文が完成した二八年一月頃までに、記念碑の本体は、予定図（図5①）のように完成していた。すなわち、初代記念碑の位置に残された台座に加工を加え、その上に据えるための万成石の八角柱の碑の制作と「福沢諭吉誕生地」の刻字および追加される飾り石の制作は完成し、さらに、周囲の新たな柵の設置工事も進められていたのである（図5②<sup>47</sup>）。

ところが、ここで大阪大学側より碑の形状が墓碑を連想させるとして、強固な反対が唱えられ、計画通りの建碑は出来なくなったのである。この点について前述の山川は「去年〔昭和二八年〕の夏から秋にかけて、三日にあげず、交渉に阪大に通い杉道助さんにも御苦労をかけて諒解を得ようとしたが、ダメ」と語り、塾長も挨拶に行ったとある。<sup>48</sup> 除幕式の最終的な延期は「本年〔昭和二九年〕の松の内」というから、除幕予定の一〇日以内まで予定通り行うことを模索していたことになる。山川は「あの時無理に除幕したらやれないこともなかったと思うが、決して結果はよくなかったと思う」とも語っている。そうすると、この時点では当初案で阪大側の諒解を得ることだけを目指していたと考えられる。

除幕延期によって碑の新たなデザインを検討せざるを得ないこととなり、新たに設計されたのが図6である。ここで注意を要するのは、題字部分である。これは既に出来上がっている八角柱の碑から、「福沢諭吉誕生地」

と刻まれた部分を切り抜いて再利用し、その左右に新たに石をあつらえるという案であった。この案については、詳細な平面図、立面図が残っており、全容を知ることが出来る。しかしこの案も、墓碑を連想させるといふ当初からの阪大側の反対を覆すものとはならなかったとみえる。さきの趣意書において阪大側の協力者として名に見える宇山病院長が「昭和二九年春」のこととして書き残している次の回想は、当初案と第二案を混同しているように思われるが、当時の状況を生々しく伝える唯一の資料である。

それ〔記念碑設計図〕を見ますと、こんどは円筒形ではなくて、正方形、高さ二米許の御影石であったと思いが、立派な碑であったのはよいが、設計図をよく見ると、「福沢諭吉之墓」と書き直したら、その儘墓になってしまい相なのに驚き且つ困惑したのでした。何しろ病院というところは、四とか九とかの文字を忌む許りでなく、お墓の話はもとより、墓石が病院の前に建っていたのでは、流石無頓着な私も、首をかしげざるを得なくなりました。そこで慶応の方に、これではどうしても我慢が出来兼ねます。この儘ですとお断りする他ありませんという、先方は既に石屋に注文して石を選定し、小泉先生に碑文まで書いていただいていますので、世話人としても面目まるつぶれになりますので、どうか枉げてご承諾願いたいものです、手を替え人を替えて、ひたすら懇願する許りでしたが、これだけは私の方でも折れる訳には行かないので、設計を変更して、碑に相応しく、且つこの場所は堂島川畔に面し、その上病院の表玄関に近いところであるばかりか、何れは各地から福沢先生の生誕地を一見したい人達がくるにちがいないのですから、それに恥かしくない、風致を損ねないようなものを作っていただければ、喜んでお引受けいたしました(49)と頑張り通しました……。

この時の再建は、もっぱら在阪の慶應義塾出身者有志が行う、いわば手作りの準備であって、慶應義塾当局が直接関わらない形で進行し、阪大側との意思疎通に齟齬が生じていたと考えられる。

ここで、記念碑再建のためには全く新たな第三案が必要となったが、既に除幕式直前まで進んでいたため資金も大部分が使われており、新たに高名な彫刻家に依頼して全く新しく碑を作り直すことは不可能であった。

その条件の下でデザインは阪大側の預かりとなり、宇山と共に旧案に強く反対した一人で当時の阪大医学部長梶原三郎がその立案に当たった。彼は阪大医学部にほど近いいきつけの喫茶店の木彫りによる統一的内装を心に留め、その設計者が喫茶店経営者の縁者と知ると、その人物に碑のデザインを任せることを思い立つ。その店は、誕生地からも堂島川を越えておよそ徒歩一〇分ほどの位置にある喫茶店ボア<sup>(50)</sup>であり、内装を手がけたのは店主の親類の彫刻家、中島雅二(牙刀)<sup>(51)</sup>であった。資金も材料も時間も限られたこの困難な条件の中で、記念碑を完成にこぎ着けるために白羽の矢が立ったのであった。

その後の経緯は、梅溪昇氏が発掘された中島宛の書信や本稿執筆に当たって入手することができたその他の中島旧蔵資料に詳しい。

この件を中島が最初に打診されたのは、昭和二九年三月六日、ボア店主室谷英乃からの手紙によってであるが、本格的に始動するのは二か月後(五月六日付)の山川迪吉からの連絡以降のことらしい。しかし主導権はあくまで阪大側にあり、当初山川は「建立の場所が阪大の土地であり、特に重大な使命を持つ病院と言うものが主たるものでありますので、記念塔は僅かに之れに附帯する問題に過ぎませんので、此れに対して第三者の私共が御指図する事の出来ない立場にありますので、直接阪大の責任者に御交渉を願うが正当の筋合でありま

す」と明記した手紙（五月二八日付）を中島に送ると共に、同文写しを梶原のところにも送っているほどであり、阪大側に対する配慮がよくわかる。ただし、それとは別書面で「私個人の気持ち」として「福沢先生は御承知の通り形式を排し、実学を尊重されましたのですから美術文学等は別といたしまして余り形に囚われぬ事が吾々その教を受ける者の精神であります」として「誕生地が此処であると言う事を表示」すれば足りるが、それに加えて、堂島川畔の「環境からみて最も美しく感じの良い形」を希望すると書き加えている。まもなく山川はデザインの方角性を中島と直接交渉してよいとの許可を梶原から得られそうだと伝え（六月三日付）、中島が示したラフスケッチから具体的なデザインの交渉を開始している。

中島が山川に提出したスケッチは現存しないが、山川の書簡を検討すると、背面を鳩の姿にした題字、机（書見台）をイメージした碑文、乳児をかたどった彫刻の三つの要素から成るデザインだったと考えられる（図8①参照）。乳児像の発案者は梶原であり、室谷英乃から中島に最初に送られた手紙はすでにその案に言及している。山川は「大衆の凡人はヤレ似て居るとか、似て居ないとか、つまらぬ比評を致しますので」とそれを好まない意向を中島に伝えている。さらに「題字の裏に鳩の像は大変面白く拝見しましたが、既に出来上って居る石を削って出来たら良いと思います」とあり、「余りそんな色々のものが無い方が良いのではないかと思はれます」とも書いていることを受け、乳児像は取りやめとなり、鳩型の題字は既存の石材を有効活用する方法が模索された結果、既に制作された八角柱の碑から「福沢論吉誕生地」と刻んだ部分を中心に石を切り出して鳩の胴体を作り、同じ万成石によって、別途両翼を制作することとなった。つまり、現在の碑の題字部分は、当初作られ日の目を見なかった八角柱が再利用されたものである。

裏側に鳩を刻むのは、墓碑に見えろという阪大からの抗議に対し、病院側に平和の象徴である鳩を見せると

いう発想であり、中島は「彫刻的には病院側が正面に成る如く考案したものです」と書いている。<sup>(52)</sup> また、平和の象徴としての鳩が選ばれたのは、戦後日本の民主主義の祖であるという当時の福沢像の反映と考えられ、それは碑文に見える「西洋文明東道の主人」、「封建的觀念形態の打破」に努力したとの記述とも共鳴する。その鳩が旧来の日本を象徴するような真つ黒のアメーバ状の御影石から垂直に飛び出すようにデザインされた姿は、戦後日本の思想的原点を象徴的に描いたものと考えられるのである。

その後、六月中旬までに山川と中島の間で現在の碑とほぼ同じ鳩型と書見台のイメージを継承した撰文のデザインが固められ、中島は六月二三日、大阪大学医学部に梶原を訪問、さらに翌二四日には医学部の教授たちの前で碑について直接説明し、基本的な合意を取り付けた。この頃、山川と梶原は連絡が完全に断絶していたらしく、大阪商工会議所伊東俊雄がその仲介に当たっていたことが書信からわかる。この時提示されたデザインの詳細は明らかでないが、鳩の両翼の裏側（題字から見れば表側）には福沢誕生当時の中津または大坂の子供用玩具の図が刻まれる予定であった（図8③参照）。しかし今回新たに見出された山川の中島宛書簡の一つ（六月三〇日付）によれば、藤浦洸（慶應義塾出身の作詞家、この件との関係は不詳）や「石屋」からの、うまく出来るかわからないのでやめた方が良いとの意見を受けて、何も刻まないこととなった。さらに山川からは七月上旬に梶原および病院事務長のもとで最終的な承認を得、原型の制作、石材の加工と工程も進められていき、ここによりやく碑は完成することとなった。

着工日時など工事の詳細は不明であるが、施工は西林石材工業（中谷久男）である。中谷は石工といっても彫刻家ではなく、中島は木彫の専門家であることから、二人が綿密に連絡を取り合いながら大変な苦心を重ねて製作に当たったことが、中島旧蔵資料中の書信に伝えられている。しかし、完成に至る複雑な経緯から、碑

には設計者や施工者は刻まれなかった。完成した記念碑は、高さ一六六センチ、最大幅一三三センチ、奥行き六七センチ。撰文は縦七七センチ、横一〇四センチ（台石）である。<sup>(53)</sup>

除幕式は、昭和二年一月四日に記念碑前で挙行された。当日は、関西在住の福沢の子孫右近久子が除幕、慶應義塾長潮田江次、全国連合三田会代表武藤絲治、大阪大学総長今村荒男、大阪府知事赤間文三（代読）、大阪市長中井光次、大阪商工会議所会頭杉道助が祝辞を読み、題字を揮毫した小泉信三、設計者中島雅二をはじめ、約二〇〇名が参列したという。

中島は当日の祝賀会で「私はこの碑を作らして頂きました。然しこれに魂を入れるものは皆様なのです」と挨拶し、山川には「一世一代の精進をしての設計」と語った<sup>(54)</sup>。

ところで、碑の題字部分は辛うじて再利用されたものの、それ以外にも、周辺の様々な造作が既に完成しており、それらは記念碑の位置に据え付ける工事までほぼ終了していた写真が残されている（図5②）。それらは廃棄処分されたわけではなかった。

この時の石材については、山川迪吉自身が眠る山川家の墓に利用されていることが判明した。迪吉孫勇氏のご教示により墓所を調査させて戴いたところ、そのまま転用されていることが明らかなのは、鎖の柱部分と縁石であり、他は再加工されたり新たに用意されたものと思われるが、墓誌の裏面には「大阪堂島川畔福沢諭吉誕生地記念塔の余材を以てこれを建つ」と刻まれている<sup>(55)</sup>（図7）。

一旦完成しながら、墓碑にみえるという阪大の抗議によって日の目を見ることの無かった記念碑の部材が、その記念碑建立に奔走した人物の墓碑となっていることは、皮肉ともいえるが、孤軍奮闘した人の足跡がこのような形で伝えられることとなったのは、実に興味深い事実といえるだろう。

記念碑完成から五年後の昭和三四年、慶應義塾創立一〇〇年を記念して山川迪吉が世話人となって記念碑敷地の植樹が行われた記録がある。<sup>(56)</sup> また翌昭和三五年一月一〇日の福沢誕生日に合わせ、慶應義塾長、大阪慶應倶楽部会長、大阪大学総長も参列して「福沢先生生誕一二五年記念式典」が、記念碑の前で挙行された。<sup>(57)</sup>

## 六 撤去に次ぐ撤去

### (一) 阪大附属病院新築工事と復元除幕式

昭和三七年以降順次進められた大阪大学医学部附属病院の改築工事において、この碑の周辺は大きく変化することとなるが、残念ながらその経緯についてもまとまった資料が乏しい。

従来この時の異動について、たとえば富田正文は「阪大病院の改築工事のため一時東に移動したが、昭和四一年一月一〇日に復元除幕式が行われた。しかし、この位置も中津藩蔵屋敷跡から東に約五〇メートルずれていることがわかり、昭和六〇年一月一三日、「福沢論吉生誕地顕彰会」と大阪市の手で西方に移動<sup>(58)</sup>と記述しているように、改築工事に伴い一時移動したものを昭和四一年に復元したが、それがのちの時代考証によりずれていると判明して、昭和六〇年にさらに移動したという記述になっているものが多い。これは事実と異なるのであるが、このように誤伝されたことも理由あつてのことである。

この点について、大阪慶應倶楽部の書類中より「福沢先生生誕碑にまつわる裏話」と題する平成四年五月付の同倶楽部評議員岩田信平の回想談を見出した。

福沢先生生誕碑にまつわる裏話

昭和37年に大阪大学附属病院の建替工事が始められた。昭和29年には嘗て昭和4年に建立された鑄銅製の碑が戦時下の供出となったため、改めて先生の生誕碑並びに此の説明碑が再建されたのであるが、病棟の建替により新病棟の工事に際して撤去されてしまった。当時大阪慶應倶楽部は会長に飯田慶三氏（高島屋社長）、幹事長に來住通夫（昭和16年前期卒）の構成であった。ところが或る日倶楽部責任者に会いたいという連絡が大阪大学病院の事務長よりあったので、幹事長が出向いたところ、事務長が申し出でられたことは「新病棟着工の際に撤去し一括保管してある記念碑を出来るだけ早く引取ってもらいたい」ということであった。そこで倶楽部としては「建物の敷地として工事の妨げがあるならば一時撤去も已むを得ないであろうが、工事終了後は病院の業務に差支えない位置に復元方を依頼した所、先方は「上部機構の決定に従って執行するだけで、そのような交渉をする権限も責任も持っていない」という返事で、そもそも私的物件が国有地内にあることがおかしいという発想からのこと、と察せられた。後日幹事会で此の間の経緯の報告と当面の措置が付議された。そこで私はたまたま義父が当時の大阪大学総長の赤堀四郎先生と懇意の間柄であったので、うまくゆくかどうかわからぬが倶楽部の意向を披瀝してお願いしてみることとなった。その結果赤堀総長にお会いしてみた所、快く善処の努力をしてみようとの御返事であった。後日大学側から正式な返事があり、工事完了後は従前位置より多少動くかも知れぬが、復元することである。無事除幕式を行うことが出来たのである。そして昭和60年1月13日には再度元の位置に移動され、大阪大学、大阪市、塾側の御支援をも得て一段と整備されて、現在の位置にあるのである。何分30年前のことであるが、此の際御披露しておくことも無駄ではあるまいと思ひ、筆を執った次第です。（中略）平成4年5

月吉日

評議員 岩田信平（昭和16）（後）（法卒）<sup>(59)</sup>

一方からの回想に過ぎないが、これを読む限りでは、病院新築工事に伴い記念碑は特に事前告知のないまま完全に撤去、その後大阪慶應倶楽部に引き取りが打診され、交渉の結果、可能な場所への再建が実現することとなった、という経過であったと思われる。

除幕式に関する当時の文献に、この経緯が漠然と記載されているのは、阪大への遠慮によるものであろうが、一旦撤去されたものを再建するという意味での「復元式」であったものが、移動されていたものを元の位置に「復元」したものと誤解され、上記のように後日の記載が混乱したものと思われる。<sup>(60)</sup>

移転位置は、病棟正面入口車寄せの西側、従来の位置からおよそ五〇メートル東側であった。病棟建物と道路との間の土地がやや広くなっていた場所であり、従来の碑の構成を維持して移転可能な位置が選ばれたと考えられる。その位置は明らかに中津藩蔵屋敷跡からは外れている。

また、この時も碑の移転交渉への慶應義塾当局の関心の形跡が無く、もっぱら大阪慶應倶楽部において行われたものと見える。この時の工事に関する記録はほとんど残されていない。記念碑が撤去された期日は不明、復元工事は昭和四〇年一二月二二日に大林組の施工によって完了した。<sup>(61)</sup>

除幕式は昭和四一年一月一〇日の福沢誕生記念日に行われ、慶應義塾長永沢邦男、大阪慶應倶楽部会長飯田慶三、大阪大学総長赤堀四郎らが参列、除幕は永沢塾長、飯田会長によって行われ、参列者は二五名ほどであった。<sup>(62)</sup>

なお、それ以前の記念碑敷地は、芝生が貼られ、のち黒玉石詰めに変更されていたが、多くの写真では雑草が繁茂している。この移転工事後、碑の周囲がコンクリートで固められたのは、管理のしやすさからであろう。碑の外縁には新たに高さ三〇センチ弱の低い鎖が設置され、碑には近づく者が少なくなった。また堂島川との間にある道路の両側は駐車スペースとなり、碑の前にも車がぎっしりと並ぶようになった。

ところで、もう一つ重要な変化として、阪大附属病院の新築工事期間中、「福沢井蹟」が消失してしまった事実がある。昭和三七年一二月頃と推定される山口病館取り壊しの際、注意が払われなかったことから建物と共に失われ、その位置もわからなくなってしまったのである。<sup>(63)</sup>復元除幕式の際にはすでに失われていたため、『三田評論』の記事は旧病院内には「福沢井蹟」と刻んだ大理石が埋められてあった」という表現になっている。<sup>(64)</sup>

大阪大学の側では構内に記念碑が同居していても、同大学の歴史中に位置づけられるものではなかったようである。たとえば『大阪大学二十五 year 誌』に、年表や地図を含めて記念碑および福沢井蹟に関する記述が全く見られないのはそのためであろう。この時の撤去に当たり「私的物件が国有地内にあることがおかしいという発想」が感じられたとあるのも、そのことを指しているものと考えられる。結局この原因は、昭和四年の建築当初の大阪医科大学と維持管理の委託関係や所有権が曖昧であったことに起因すると考えられる。しかしこの移転の際も、所有に関する権利関係には変更が加えられなかった。

## (二) 中津藩蔵屋敷跡記念碑建立

その後二五年余りの歳月を、ほとんど顧る者の無いままに経た誕生地記念碑の転機になるのは、昭和五六年

七月、一万円札に福沢諭吉肖像が採用されると発表されたことである。福沢の郷里である大分県中津市は、紙幣肖像への採用と、昭和六〇年に迫った福沢諭吉生誕百五十年を契機として中津市の「福沢諭吉翁顕彰会」が中心となり、「中津藩蔵屋敷跡」の記念碑を建立し、これを大阪大学に寄附している。

この碑は福沢諭吉誕生地記念碑の西側（左隣）に建てられた高さおよそ二メートルの角柱で、正面に「豊前国中津藩蔵屋舗之跡 大阪堂島玉江橋北詰」とあり、右側側面に「従是中津迄 海路百三十里 陸路百三十五里」左側に「従是江戸迄 海路二百四十八里 陸路百三十三里」、背面には「昭和五十八年四月吉祥日建之大分県中津市／中津市長八並操五郎謹書」と刻まれている。

除幕式は昭和五八年五月一六日に行われた。除幕式には顕彰会会長の中津市長八並操五郎、大阪大学医学部長坂本幸哉、同病院院長最上平太郎ら約四〇人が参列した。<sup>(65)</sup>

(三) 「福沢諭吉生誕顕彰碑」の整備

新一万円札発行と福沢生誕一五〇年を契機に、大阪においては福沢を大阪出身者としてもっとアピールすべきであるとの意見が大阪市会で採り上げられ、大阪市経済局などが顕彰のあり方の検討を開始した。昭和五九年三月、大阪市は記念碑を再構築し「大阪の諭吉をPR」し「観光コースの一つの目玉に」すると発表<sup>(66)</sup>、八月には大阪慶應倶楽部と大阪市の提携により「福沢諭吉生誕地顕彰会」を結成、九月より、同会を名義として五〇〇万円を目標とする記念事業募金が、大阪慶應倶楽部を中心に呼びかけられた。この時の趣意書は次の通りである。

福沢諭吉生誕150年記念事業募金について

慶應義塾の創始者福沢諭吉が天保5年（1834年）大阪中津藩蔵屋敷でお生まれになって明年1月にはいよいよ生誕150年を迎えることになりました。

福沢先生は十数年中津に戻っておられました。後年再び大阪に來られ、築地鉄砲洲に蘭学塾を開かれる前年まで適塾に学ばれておられます。

この度、大阪慶應倶楽部ではこのように大阪にゆかりの深い福沢先生の生誕150年を記念して福沢諭吉生誕地顕彰会を設置してこれに相応しい顕彰事業を行うことに致しました。

福沢諭吉生誕地碑は堂島川玉江橋畔にあり昭和4年に建立されましたものが戦時中の銅製品などの供出により取払われ、昭和29年11月大阪慶應倶楽部が再建したものであります。

しかし、現在の生誕地碑は阪大病院の新設工事に伴い移設された経緯があり、今回の顕彰事業の検討に際しては、本来の中津藩蔵屋敷跡地への復旧と新しい記念碑の建立を含めた斬新な修景を行いたいと考えております。

又、本事業は大阪大学医学部の厚意と地元福島区の熱意もあって大阪市の文化観光事業としての助成金も得ることが出来、市と共同して推進する運びとなっております。

今秋新一万円札に登場されるよい機会に、福沢先生を、大阪で生まれ大阪がはぐくんだ近代日本の先覚者として、一般市民にもあまねく紹介し、その思想と業績に親しんでもらおうとの趣旨が賛同されたものであります。

生誕150年という記念すべき年の歴史に残る事業としてこの生誕地顕彰事業を是非共成功させたいもの

であります。

就きましては、事業費の捻出を含め皆様の大なるご支援が不可欠であり時節柄多事多端の折とは存じますが、何卒趣旨に御賛同戴き度、別記の通り事業計画並びに募金計画についてご案内旁々ご依頼申し上げますので深甚なるご協力をお願い申し上げます。

昭和59年9月吉日

大阪慶應倶楽部

福沢論吉生誕地顕彰会

会長 井上 徳治

この運動の主体は、やはり大阪慶應倶楽部であり、顕彰会の役員もすべて倶楽部の役員が構成していたが、大阪市からは助成金を受け、碑の再構築や移転位置の調査などについて全面的な協力を得た。事業費はおよそ八〇〇万円で、その目的は、(ア) 記念碑の旧来位置への移設と、(イ) 新記念碑の建立、さらに(ウ) 中津藩蔵屋敷跡の記念碑も含めた記念碑群の修景であった。<sup>(67)</sup>

(ア) については、当初阪大との交渉の結果、病院敷地北東隅の辻が切れている角への移転が検討され、その検討資料も残されている。しかし、これでは、現在地よりも中津藩蔵屋敷跡から離れ、人目につきにくくなってしまふこととなり、この時最も重視されていた「PR」という観点からは、むしろ逆効果になることから、人通りが多い玉江橋北詰に近付け、従来位置に戻すことが検討された。

移転位置については、旧位置の時代の阪大病院図面を現在の病棟と重ねて検討された図面が残されているも

の、厳格な考証の上で史実上の誕生地に復元したということではない。「福沢諭吉生誕地顕彰会事業計画書」は移設位置について「昭和29年に建立された場所の近くに移設することとする」としている。<sup>(68)</sup>従って、かつて碑が建っていたおおよその位置に移動したと考えるべきである。その位置は、阪大に提出された「寄附採納願」の付図によれば、病院敷地の西端から記念碑敷地の西端までを「約33メートル」とする場所である。<sup>(69)</sup>

(イ) 新記念碑は、「福沢先生の偉業を伝える石碑を附加する」意図で設けられたものとなり、福沢が誕生した後、生涯の活動を通して残した思想の中身を伝えることが主目的だったと思われる、当初図案には「独立自尊」と書き込まれている。最終的には、慶應義塾長石川忠雄の筆により「天八人ノ上二人ヲ造ラズ人ノ下二人ヲ造ラズ」と記された碑文を刻む白御影石の碑となった。<sup>(70)</sup>背面には「昭和六十年一月十日／福沢諭吉生誕地顕彰会建之／慶應義塾長 石川忠雄書」と刻まれ、高さ〇・八メートル、幅一・二メートルである。

(ウ) 従来鳩型の題字の左手前に離れて設置されていた撰文を、題字の正面に移して一体のものとし、さらに「中津藩蔵屋敷跡」記念碑を右側手前に（移築以前は左側にあつた）、石川筆の新たな記念碑を左側に配した。その三つの碑の背景には新たに佐世保産の玄武岩の六方石（高さおよそ一・五メートル）が二三本立てられた。これは「福沢諭吉に縁のある方々や門下生、影響を受けた方々をあらわし、正面左手方向に向かって、未来への発展を象徴している」。<sup>(71)</sup>この工事によって中島雅二がデザインした従来の碑周辺の景観は一変し、全く一新されたのである。この時、題字の下にあつたアメーバ状の黒石はおそらく碑と一体のものであることが理解されず廃棄され、また六方石は病棟と碑の間を遮断する形となつてしまい、鳩をかたどつた面こそが正面であるとの中島の構想は継承されなかつた。

移転、修景工事は一月一四日に着工、二月一五日に竣工し、関西石材工業が施工した。除幕式は、福沢

諭吉生誕地顕彰会会長（大阪慶應倶楽部会長）井上徳治、慶應義塾長石川忠雄、大阪市長大島靖、大阪大学学長（代理）はじめおよそ一五〇名の出席のもと、昭和六〇年一月一日に行われ、神戸在住の福沢の子孫米山春子が除幕を行った。

除幕式終了後、福沢諭吉生誕地顕彰会より「福沢諭吉生誕顕彰碑」が一括して大阪大学に寄贈され、一月一日付をもって大阪大学に所在する国有財産として登録された。これをもって、昭和四年の最初の建碑から生じていた記念碑所有に関する曖昧さはようやく解消されたこととなる。その内訳は「福沢諭吉誕生地記念碑」「同説明碑」「同記念石碑」「同修景施設」とされている。<sup>(72)</sup>「中津藩蔵屋敷跡」記念碑は、すでに昭和五八年の単独の除幕の際、大阪大学に寄贈されたため、国有財産として登録されていたものと考えられる。

このように記念碑が整備される頃より大阪大学内にもこの碑についての関心が高まり、『大阪大学五十年史』編纂に加わられた梅溪昇氏はこの碑の再建経緯を明らかにし前述論文に発表、また五十年史にも記念碑について記述された。さらにこれに触発され、阪大病院長垂井清一郎氏は失われた「福沢井蹟」に関心を持ち、独自の調査からその位置を推定し、昭和六一年一〇月、西病棟内一階に福沢井蹟を示すプラスチック表示板を設置した。そこには「福沢井蹟／天保五年（1835年）／福沢諭吉誕生」と記された。また記念碑の西側に「福沢諭吉井蹟　ここより西へ二米／北へ十米」、裏面に「昭和六十一年十月吉日」と記す標柱を設置した。<sup>(73)</sup>

#### （四）阪大附属病院移転後の変遷

ようやく安定的な維持が図られる見通しの立った記念碑の次なる波乱は、大阪大学医学部附属病院の移転、国有地の売却という事態であった。同病院の移転が広く報道され始めた平成四年頃より、大阪慶應倶楽部、中

津市、大阪市会などがそれぞれ阪大病院や大阪市に保存を要望する運動を活発化させていく中、平成五年八月末までに、同病院は吹田キャンパスに移転を完了した。既に老朽化し、解体を待つばかりとなった阪大病院建物は、平成六年三月頃にフェンスで囲まれ、翌年十二月にフェンスが移設されるまで、記念碑は見学不能となっていた。その後は福島区役所が管理を開始する。建物は平成一年頃に解体され、「福沢井蹟」の表示は、再度失われてしまった。

平成一二年九月、堂島川治水のスーパー堤防整備工事のため、記念碑全体が解体され、堂島川に面した道路と建立地一帯の嵩上げ工事が行われた。これにより建立地は従来地表よりおよそ三メートル高い位置まで盛り土され、一二月下旬に「新しい堤防上の現況と同位置」に再設置された。その間碑は大阪府西大阪治水事務所に保管され、植栽は全て新しいものとなった。<sup>(74)</sup>

以後、所有や貸借関係は複雑に変わったので列挙すれば以下の通りである。

平成一三年一二月 敷地全体・大阪大学↓文部科学省国立学校財務センター(移管)

平成一四年三月 敷地全体・国立学校財務センター↓都市基盤整備公団(用地交換)

平成一四年一二月 記念碑・都市基盤整備公団↓大阪市(寄贈)

記念碑立木・都市基盤整備公団↓大阪慶應倶楽部(無償譲渡)

記念碑敷地・都市基盤整備公団↓大阪市(土地使用貸借)

平成一六年三月 敷地全体・都市基盤整備公団↓朝日放送(譲渡)

記念碑敷地・朝日放送↓大阪市(土地使用貸借)

このめまぐるしい変遷の鍵は、国有地ではなくなったことに伴う課税の問題である。平成一四年三月、国立

学校財務センターから都市基盤整備公団に土地所有が移ることによって、従来非課税であった固定資産税が発生することとなったため、同年初旬頃、大阪慶應倶楽部会長（福沢諭吉生誕地顕彰会会長の名義と連名）宛に、国立学校財務センター、都市基盤整備公団から、記念碑を譲渡の上、敷地は以後当面公団が無償貸与するが、固定資産税は記念碑の譲受人に負担してもらいたい旨の連絡があった。大阪慶應倶楽部は慶應義塾に同土地の買取も含めた検討を依頼し、慶應義塾と文部科学省との間での協議も持たれたが、その後大阪市計画局と都市基盤整備公団の協議により、記念碑を公団から大阪市に寄贈すること、当該土地七一・五〇平方メートルは分筆の上使用貸借契約を結び、固定資産税を非課税とすることで合意に至り、スーパー堤防工事の完了を待って、一二月二七日に公団と大阪市ゆとりとみどり振興局の間で正式な土地使用貸借契約書が交わされた。ただし大阪市は、記念碑周辺の植栽については「市として管理のための予算および人的な都合がつかないこと、また地元にて管理することが困難なことなどから、受け取りを拒否」したため、大阪慶應倶楽部が引き受けることとなり、同日都市基盤整備公団と大阪慶應倶楽部の間で、「立竹木の取扱いに關する覚書」を取り交わした。これによって立木は同倶楽部に無償譲渡され、以後立木の管理は倶楽部の責任において行うこととなった。

平成一五年一二月、阪大病院建物などの地中構造物が残存していることが判明、その撤去工事の範囲に記念碑敷地がかかったため、記念碑は同月一二日より翌年三月二〇日まで完全に撤去された。撤去中、記念碑等は同敷地内に仮置きされていた。

またこれと前後して平成一〇年および平成一六年〜一七年に、阪大病院跡地の発掘調査が行われた。中津藩蔵屋敷跡に相当する部分も調査対象にわずかに含まれ、建物跡や遺物が検出されたが断片的なものに留まり、大部分は後年の攪乱が激しいとして調査対象とならなかった。<sup>(76)</sup>

平成一六年三月、この土地を朝日放送が取得し、それまで都市基盤整備公団と大阪市ゆとりとみどり振興局、大阪慶應倶楽部間で締結されていた契約、覚書は同様に継続されると共に、記念碑敷地に関する「確認書」が取り交わされた。そこには「本物件を移設する必要がある場合は、原則として移設する必要がある側が費用を負担する」こと、「本土地を第三者へ譲渡または貸与する場合は、本契約並びに本確認書にかかる内容を本土地の譲渡先または貸与先が継続して遵守するよう、甲〔朝日放送〕が本土地の譲渡先または貸与先との間で協議する」ことが明記された。

これは、記念碑の移転そのものを否定する内容ではないため、朝日放送では当初玉江橋北詰の南西隅に碑を移転する計画を検討した。しかし、中津藩蔵屋敷跡地から離れてしまうことなどについて大阪慶應倶楽部側から再考を求める強い申し入れがあったこともあり、最終的には従来位置のままでの維持が決定されたという。<sup>(77)</sup>

朝日放送本社ビル建築工事においては、記念碑の撤去は不要として準備が行われていたが、平成一七年四月頃より、記念碑南側道路に亀裂が生じ、記念碑敷地が不等沈下を起こしていることが判明したため、記念碑全体が仮撤去されることとなり、同年一月二二日、大阪市ゆとりとみどりの振興局、大阪慶應倶楽部、朝日放送関係者の立ち会いの下、「福沢諭吉誕生地記念碑及中津藩蔵屋敷跡の碑一時移転式」を行い碑を一時撤去した。<sup>(78)</sup>

朝日放送本社の建設が大詰めを迎えていた平成一九年一二月、二年一か月の歳月を経て記念碑は旧位置に元通り復元、同月一〇日、大阪慶應倶楽部によって「福沢諭吉誕生地碑顕彰碑建立定置祭」が行われ、同倶楽部および慶應義塾関係者約二〇名が参列した。記念碑が元通り見学可能な状態に復したのは、平成二〇年五月二日、周辺一帯が「ほたるまち」としてオープンしたときであった。

こうして誕生地記念碑は現在の姿となったのである。

## 七 おわりに

本稿の目的は、誕生地記念碑が非常に複雑な経緯を経て現在に至っていることについて、周辺資料を発掘し、時系列に整理し直すことであった。そのことによつて、従来混乱している事実関係を点検し正確を期すことが心掛け、福沢論吉に対する時代状況に伴う意識の変遷、記念碑そのものの成り立ちにも留意して記述した。冒頭でも述べたとおり、これらのことは歴史の大河からすればまことに些々たる問題であるかもしれないが、これまでこの地に対してどのような人たちがどのような意識を向け、どのようにその維持を図ったのかということは、福沢研究史の一側面として意味があることと思う。また、この碑の維持を巡って、いつの日か再び移動の可能性が生じた際、これまでの足跡を辿る手がかりとなり得るものである。ただし、本稿は脱稿を急いだため、調査が行き届かなかつた点も少なくない。今後も調査を継続したいと考えている。

最後に、本稿で見たとおり、この記念碑位置は、必ずしも十分な考証に基づいて定められたものではないが、それは「福沢井蹟」の位置を意識して定められており、この井戸こそがこの地を福沢の誕生地として長らく人々に意識づけていたということに再度注意を促しておきたい。今後、福沢井蹟位置の何らかの再掲示の機会が訪れることを期待したい。

〔付記〕 本稿執筆に当たっては、以下のように非常に多くの方のご協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

小田晶子氏、山川勇氏、市山哲氏、中島榮一郎氏、新鎌倉彫・牙刀流研究所浮彫社森本勒弥氏、大阪大学名誉教授梅溪昇氏、同企画部松本紀文氏、大阪府立北野高等学校高橋昌弘氏、大阪慶應倶楽部会長銭高一善氏および幹事各位、同事務局中山敦子氏、慶應大阪リバーサイドキャンパス小崎由紀子氏。

注

- (1) この地の変遷については『大阪市福島区堂島蔵屋敷跡Ⅱ』（財団法人大阪市文化財協会、二〇〇六年）、七七頁以下に詳しい。
- (2) 「福沢先生の誕生地に就て」『慶應義塾学報』四八号（明治三五年一月）、八四―八五頁。「福沢諭吉伝」では、この証言を平易に書き改めて掲載している。
- (3) 小泉信三「福沢諭吉と大阪」『小泉信三全集』（文芸春秋、昭和四二―四五年）第一八卷。森田康夫「福沢諭吉と大阪」（和泉書院、平成八年）ほか参照。
- (4) 『福沢諭吉全集』第一九卷、一六七頁。
- (5) この間の経緯は前掲梅溪『福沢井蹟』の現在位置についてが詳しい。
- (6) 不二樹幾之助「七十翁懐旧録」『創立五十周年』（大阪府立北野中学校六校同窓会、昭和八年）、一三〇頁。
- (7) 前掲『創立五十周年』口絵、前掲梅溪『福沢井蹟』の現在位置について、二四〇頁に同じ写真が掲載されている。
- (8) 前掲『大阪市福島区中津藩蔵屋敷跡Ⅱ』、六頁。
- (9) 『創立百十周年』（大阪府立北野高等学校、昭和五八年）、一八頁。
- (10) 前掲『創立五十周年』口絵、前掲『創立百十周年』、一八頁、『北野百二十年』（大阪府立北野高等学校、平成五年）、五六頁など。
- (11) 前掲『創立五十周年』、一三三頁、一四三頁。矢部は嘉永五年生まれ、明治七年四月に慶應義塾変則科を卒業して

- いる。その後も各地の諸学校で教育者として活躍した。三田商学研究会『慶應義塾出身名流列伝』（実業之世界社、明治四二年）、五八七―八頁。沢井については経歴等不詳。吉見は和歌山出身で明治七年に慶應義塾入学。中村は大分出身、明治三年慶應義塾に入学。『慶應義塾入社帳』（慶應義塾、昭和六一年）参照。
- (12) 「坂神同窓有志者の福沢先生饗宴会」『時事新報』（明治三二年九月二八日付）。
- (13) 卒業生の回想にも「当時福沢氏がこの屋敷の長屋で生れた事実は余り知られなかつたらしい」という記述が見える。前掲『創立五十周年』、一四二頁。
- (14) 福沢が非常に高く評価した後藤象二郎の銅像建立に反対したことについては『福沢諭吉伝』第四卷、七四七頁。また福沢が作成した蘭学の先人たちを顕彰する施設の企画書である「蘭化堂設立の目論見書」にも先人の顕彰には石碑を建てることも一法であるが「建碑の事たる、動もすれば外観のみに存して実に速きの憾あり」とある。『福沢諭吉全集』第二〇卷、三八七頁。
- (15) 前掲『福沢諭吉伝』第三卷、六〇六頁以下参照。
- (16) 「福翁誕生地記念碑建設」『大阪毎日新聞』（明治三六年二月五日付）。『慶應義塾学報』六一号（明治三六年二月）、七三―七四頁にも同文が掲載されている。
- (17) 『七十年史』（大阪府立大手前高等学校、昭和三三年）、四六、五八頁。
- (18) 前掲『福沢諭吉伝』第一卷、二二二頁。当時高等女学校が所在し、志立は新聞などに女性の生き方について寄稿するなど社会活動に積極的な女性であったことと関係があると思われる。松の木の位置については、梅溪『福沢井蹟』の現在位置について、二二七頁に当時の教員の回想に基づく図が引用されている。
- (19) 『大手前百年史』（金蘭会、昭和六二年）他参照。
- (20) 『大阪大学五十年史（部局史）』（昭和五八年）、一三〇頁。
- (21) 「福沢先生誕生地建碑」『三田評論』二四三号（大正六年一〇月号）、六八頁。

- (22) 「福沢先生生誕地記念碑建設資金寄付者芳名帳」(慶應義塾福沢研究センター蔵 K92110-22)。
- (23) 前掲『大阪大学五十年史(部局史)』、二九三頁。
- (24) 前掲『福沢論吉伝』第一巻、二二頁。なおこの銘板は比較的小さいものであったようで、写真から筆者が推定するところでは二〇センチ四方程度のものである。
- (25) 「福沢先生関係書類綴 自昭和四年二月」(慶應義塾福沢研究センター蔵 K03051-6)。
- (26) 『三田評論』三八九号(昭和五年一月)、五四―五五頁。
- (27) 前掲「福沢先生関係書類綴 自昭和四年二月」。大国との契約書や見積書、その後福島警察署に提出された図面等が含まれる。
- (28) 富田正文『考証福沢論吉』(岩波書店、平成四年) 上巻、四五頁。
- (29) 犬養による題字は、同年二月二日付で三田の慶應義塾監局より大阪で記念碑建造事務を担当した堀田宗一宛に送られている。また山本の碑文については、一〇月九日付で堀田から送付の礼状が送られている。前掲「福沢先生関係書類綴 自昭和四年二月」所収。
- (30) 慶應義塾福沢研究センターに、左向きを指す指の形の下に、「福沢井蹟ハ此ノ奥廊下中央ニアリ」と記された金属製の板の写真が残されている (p.000376)。また、碑の完成を記念して募金者に送付された「福沢先生誕生地建碑記念絵葉書」には碑の全体写真と共に「福沢井蹟」の写真も印刷されている。
- (31) 昭和四年一〇月九日付林毅陸苑堀田宗一書簡に「先便申し上げました記念碑の位置は、愈山口厚生病院構内と決定候間、三田評論記事其他予定の通りに願上候」とあり、福島警察署宛に「記念碑建設願」を提出しているのも一〇月九日付である。前掲「福沢先生関係書類綴 自昭和四年二月」所収。
- (32) 前掲「福沢先生関係書類綴 自昭和四年二月」所収「記念碑建設願」中の付図。なお背面と左側には、除幕式後新たに右側の既存のものと同様の塀が増設され、碑がコの字型に塀で囲まれた。

- (33) 昭和七年刊行の『福沢論吉伝』掲載の蔵屋敷の図や誕生地に関する記述がそれ以上ではないこともそのことの証左であろう。
- (34) 前掲「福沢先生関係書類類 自昭和四年二月」所収。『三田評論』三九四号（昭和五年六月）にも掲載されている。
- (35) 前掲「福沢先生関係書類類 自昭和四年二月」。
- (36) 『大阪大学五十年史（通史）』（昭和六〇年）、一一〇―一二二頁。
- (37) 『三田評論』五五六号（昭和二八年三月）、四八頁および『塾友』（昭和二八年三月）、五〇頁の文中にその記載がある。
- (38) 「除幕式あとさき話」『塾友』昭和三〇年一月号、五〇頁。
- (39) 『塾友』昭和二八年三月号、五一頁。その際の写真もある。また同文記事が『三田評論』五五六号（昭和二八年三月号）、四八頁にある。
- (40) 『大阪慶應倶楽部会報』第一号（昭和二八年一〇月一日付）。
- (41) 前掲梅溪「戦後の福沢先生誕生地記念碑再建経緯について」、二五九頁掲載図は完成後の文字に合わせて図中の碑の文字が修正されているが、当初図案はここに掲げるものである。
- (42) 山川は「前回は金属で回収されたりしたので、今回は石がい、と思います……」と語っている。前掲「除幕式あとさき話」、五〇頁。
- (43) 「福沢先生記念碑撰文の件」（慶應義塾福沢研究センター蔵 K0500171）。前掲「除幕式あとさき話」、五一頁。
- (44) 前者は長崎市出来大工町の市有地に、後者は長崎市桶屋町の光永寺門前に、それぞれ現存する。
- (45) 「福沢論吉と福沢先生」、前掲『小泉信三全集』一五巻、二九八―三〇〇頁。なお初出は『福沢論吉選集』月報I（昭和二六年五月）。
- (46) この誤字については慶應義塾常務会（昭和三〇年三月二四日）に報告され、修正に着手したとの山川の報告が取り

上げられている。なお、『塾友』（昭和二九年一〇月号）口絵には撰文が活字で掲げられているが、すでに「二月」となっており、末尾には高橋のみの記名があり、小泉、西川の記名がない。ここから推測すると、『塾友』掲載文は西川による浄書前の高橋の原文を文字に起こしたものと考えられ、当初の撰文においてすでに誤記されていた可能性が高い。

(47) この当初案の設計者は不明であるが、おそらくこの碑の施工に当たった西林石材工業によるものではなからうか。

山川は「森君（孫二郎）―大阪慶應倶楽部評議員、森木材工業社長」の親しい石屋さんがいて、設計に取りかゝり……と語っている（前掲「除幕式あとさき話」、五〇頁）。

(48) 前掲「除幕式あとさき話」、五〇―五一頁。

(49) 阪大病院看護婦同窓会「会報——大阪大学看護教育七〇周年記念号」。ただし原典が確認できなかつたため、ここでは前掲梅溪「戦後の福沢先生誕生地記念碑再建経緯について」より引いた。

(50) ボアは現在、この当時とは店舗位置がやや東側にずれ、建物も変わっているが、中島が手がけた入口の装飾看板やカッパの置物、壁面装飾の一部が今も店内を飾っている。

(51) 中島雅二（一九一八―二〇〇六）は広島生まれ。東京美術学校（現東京芸術大学）彫刻科卒。鎌倉彫を専門とし、鎌倉市に新鎌倉彫研究所浮彫社を設立して活動した。なお本調査を機会に記念碑建立に関する書簡四二通、デッサン、設計図を含む資料が一括して慶應義塾福沢研究センターに寄贈されることとなった。

(52) 前掲梅溪「戦後の福沢先生誕生地記念碑再建経緯について」、二六〇頁。これは中島が梅溪氏に資料を送付した際付した説明文である。

(53) 完成当初の碑の姿は、『三田評論』五六四号（昭和三〇年三月）口絵、前掲梅溪「福沢井蹟の現在位置について」、二二九頁等参照。

(54) 「塾社中による祝賀晩餐会」『大阪慶應倶楽部会報』第三号（昭和二九年一二月）、六頁。前掲「除幕式あとさき話」、

五二頁。

(55) 大阪府池田市桃園墓地内に所在する。墓碑正面には「山川家累代之墓」とあり、材質は誕生地記念碑同様赤みを帯びた万成石である。背後には昭和一九年に戦死した三男恵三郎の十三回忌を記念して迪吉が建立した旨が刻まれている。当初は鎖もあつたが、後に撤去し現在は柱のみ残る。

(56) 「福沢先生誕生記念碑敷地の植樹」『三田評論』五八三号（昭和三四年七月）、五八頁。

(57) 『三田評論』五八七号（昭和三五年五月）参照。

(58) 前掲『考証福沢論吉』上巻、四六頁。

(59) 大阪慶應倶楽部蔵の記念碑関係書類中にあつたコピーより転載した。同倶楽部の印刷物の複写と思われるが、出典は不明である。末尾では来住幹事長にも記憶を確認の上、万全を期したとある。

(60) この時の除幕式については松田弥一郎「福沢先生誕生記念碑再建祝賀式」『塾友』（昭和四二年新年号）、『慶應義塾報』二六四号（昭和四一年一月二四日付）、『塾』一四号（昭和四一年二月）などに記事があるが、この間の経緯には言及されていない。

(61) 「福沢先生誕生地記念碑の移転」『三田評論』六四六号（昭和四一年二月）、八七頁。

(62) 同右。また、大阪慶應倶楽部所蔵写真。

(63) 前掲梅溪「福沢井蹟の現在位置について」、二四三頁。

(64) 前掲『三田評論』（昭和四一年二月号）、八六頁。

(65) 「福沢翁をしのぶ石碑」『読売新聞（大阪版）』昭和五八年五月一七日付。慶應義塾長ほか義塾関係者が列席していないのは、除幕式の前日が慶應義塾創立一二五年記念式典（横浜で開催）で、以後諸行事が関東で開催された影響と考えられる。

(66) 『読売新聞（大阪版）』昭和五九年三月二日付。「福沢論吉の誕生地／大阪市が本格顕彰」『サンケイ新聞（大阪版）』

昭和五九年三月六日付。またこの頃の大阪の機運については井形正寿「福沢諭吉の生誕百五十年によせて」『大阪春秋』（昭和六〇年四月号）が詳しい。

(67) 募金額は総計八四二万円余りで、剰余金は積み立てられた。

(68) 「福沢諭吉生誕地碑の移設等について」（昭和五九年九月二七日付）、大阪慶應倶楽部蔵（複写）。

(69) 「福沢諭吉生誕顕彰碑」寄附採納について（昭和五九年一月八日付）、大阪慶應倶楽部蔵（複写）。

(70) 石川揮毫の書は、昭和五九年一月三日付で送付され、大阪慶應倶楽部に保管されている。

(71) 大阪市経済局／福沢諭吉生誕地顕彰会「福沢諭吉生誕地顕彰施設の完成について」（昭和六〇年一月八日付）、大阪慶應倶楽部蔵（複写）。

(72) 「工作物の寄附受領に伴う国有財産増減異動報告書の提出について」（昭和六〇年一月八日付）、大阪慶應倶楽部蔵（複写）。

(73) 垂井清一郎『糖尿病物語』（中山書店、平成二二年）、二七八―二八二頁。前掲梅溪『福沢井蹟』の現在位置について、二四四頁。

(74) 「福沢諭吉記念碑一時撤去のお知らせ」および撤去作業写真（大阪慶應倶楽部蔵）。

(75) 都市基盤整備公団「福沢諭吉記念碑の維持管理について」（平成一四年一月五日付）、大阪慶應倶楽部蔵（複写）。

(76) 平成一〇年の発掘調査については『大阪市福島区堂島蔵屋敷跡』（財団法人大阪市文化財協会、平成一一年）。中津藩蔵屋敷跡を含む地域の発掘結果については前掲『大阪市福島区堂島蔵屋敷跡Ⅱ』が詳しい。

(77) 銭高一善「福沢諭吉先生生誕地記念碑について」『三田評論』一一三九号（平成二二年一月号）、七―八頁。

(78) この前後の事情については梅溪昇「朝日放送株式会社新社屋建設に伴う福沢諭吉生誕地記念碑の一時撤去・保管について」（『統洪庵・適塾の研究』（思文閣出版、平成二〇年）に詳しい。

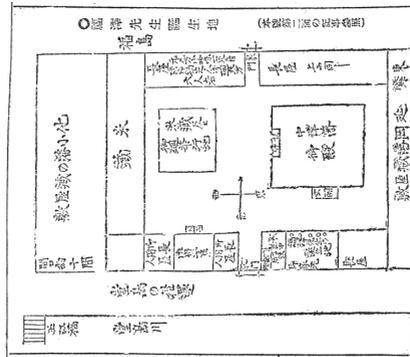


図1 中津藩蔵屋敷の見取図（『時事新報』明治34年12月14日付）。堂島川に面した表門を入り右手に「福沢先生の誕生地」とある。図4までと同じ向きになるよう回転して掲載した。

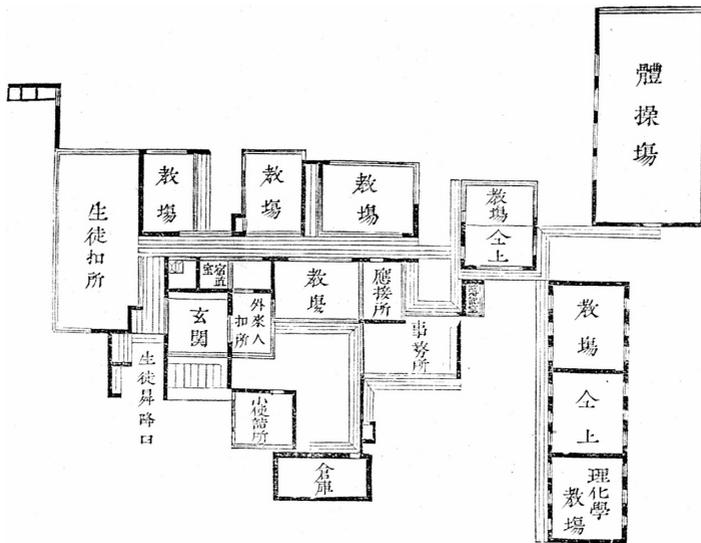


図2 大阪尋常中学校平面図（府立北野高等学校所蔵）。写真が残されているが原本は未詳。

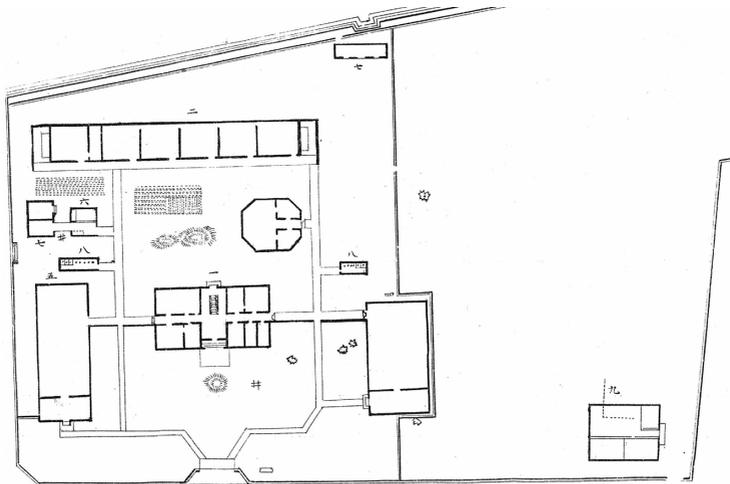


図3 堂島中学校新築校舎見取図（府立北野高等学校所蔵）。表門に入って正面の玄関右側の井戸が福沢産湯とされるもの。右側のグラウンドは一部省略した。

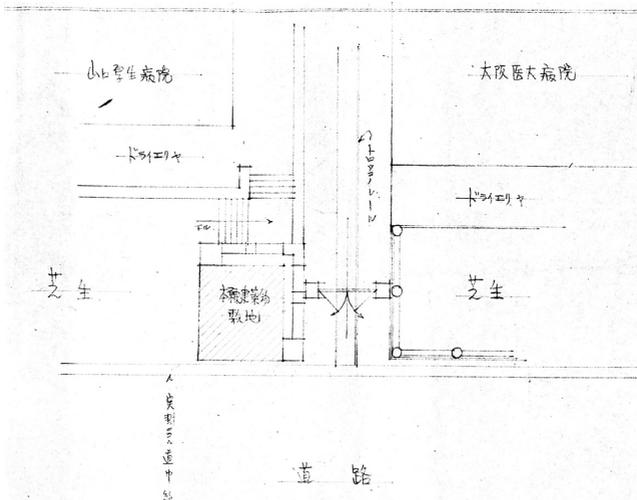
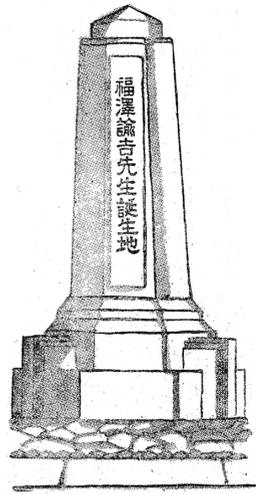


図4 「福沢先生関係書類綴 自昭和四年二月」（慶應義塾福沢研究センター蔵）所収の設計図面（部分、青焼き画像を白黒反転）「本願建築物敷地」とあるのが記念碑建立地。背後と右側の塚が既存のものであることがわかる。



②



①

図5 ①再建記念碑の最初の完成予想図（『塾友』昭和28年9月号）と②途中まで完成した工事現場（昭和29年5月、中島雅二撮影。慶應義塾福沢研究センター蔵）。

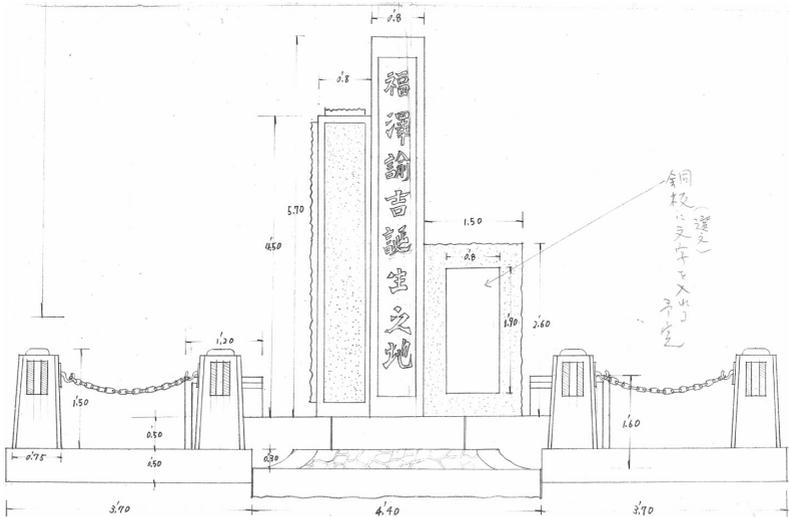


図6 再建記念碑の第二案（中島雅二旧蔵資料、慶應義塾福沢研究センター蔵）。図面に「西林」の文字が見えるものがあり、設計は西林石材工業と推定される。

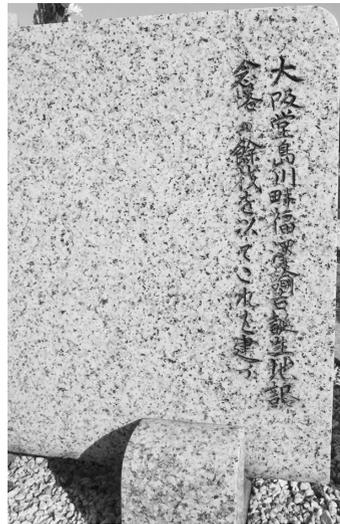
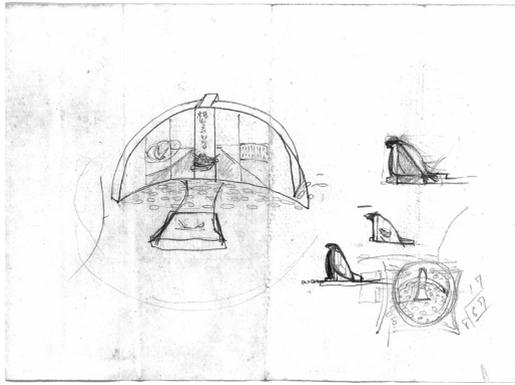
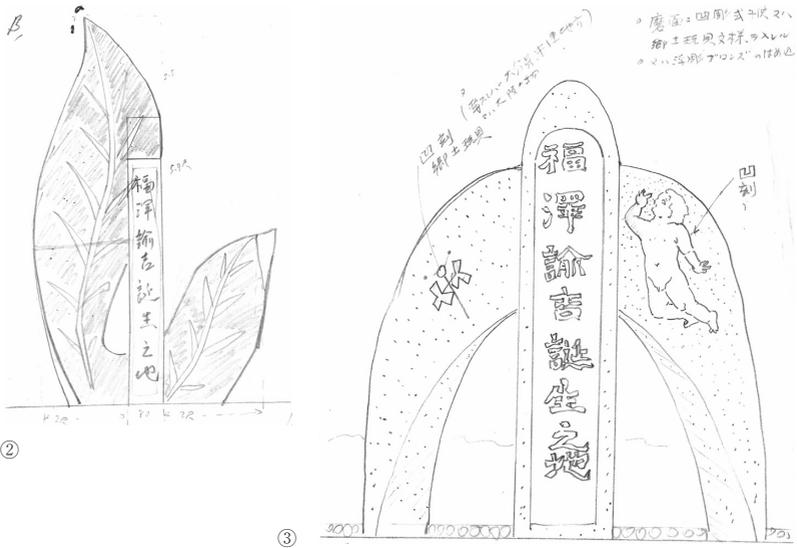


図7 山川家墓域と墓誌裏面の刻字。



①



②

③

図8 中島雅二のデッサン（慶應義塾福沢研究センター蔵）。①は最も古い構想と思われ、中央題字の手前に乳児が描かれており、背後および上から見ても鳩になっている。②は葉っぱをモチーフにした案。③は最終案に近く、反対側は鳩の姿となっているが、題字の右側に乳児、左側に玩具が描かれている。両翼に玩具のみが描かれているデッサンも残されている。